

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

磯 辺

豊橋校区史

36

Isobe







校区のあゆみ 磯辺



「磯辺小学校」 スクールアート 平成8年10月 中日新聞社提供

「むくろじ」の下で仲良く

全校児童の力を一つにして校庭いっばいに磯辺っ子の愛する「むくろじ」を描きました。その下で手をつなぎ合うのは「力いっぱい」の校訓のもと「仲良く助け合う」「たくましく元気な」磯辺っ子の姿です。

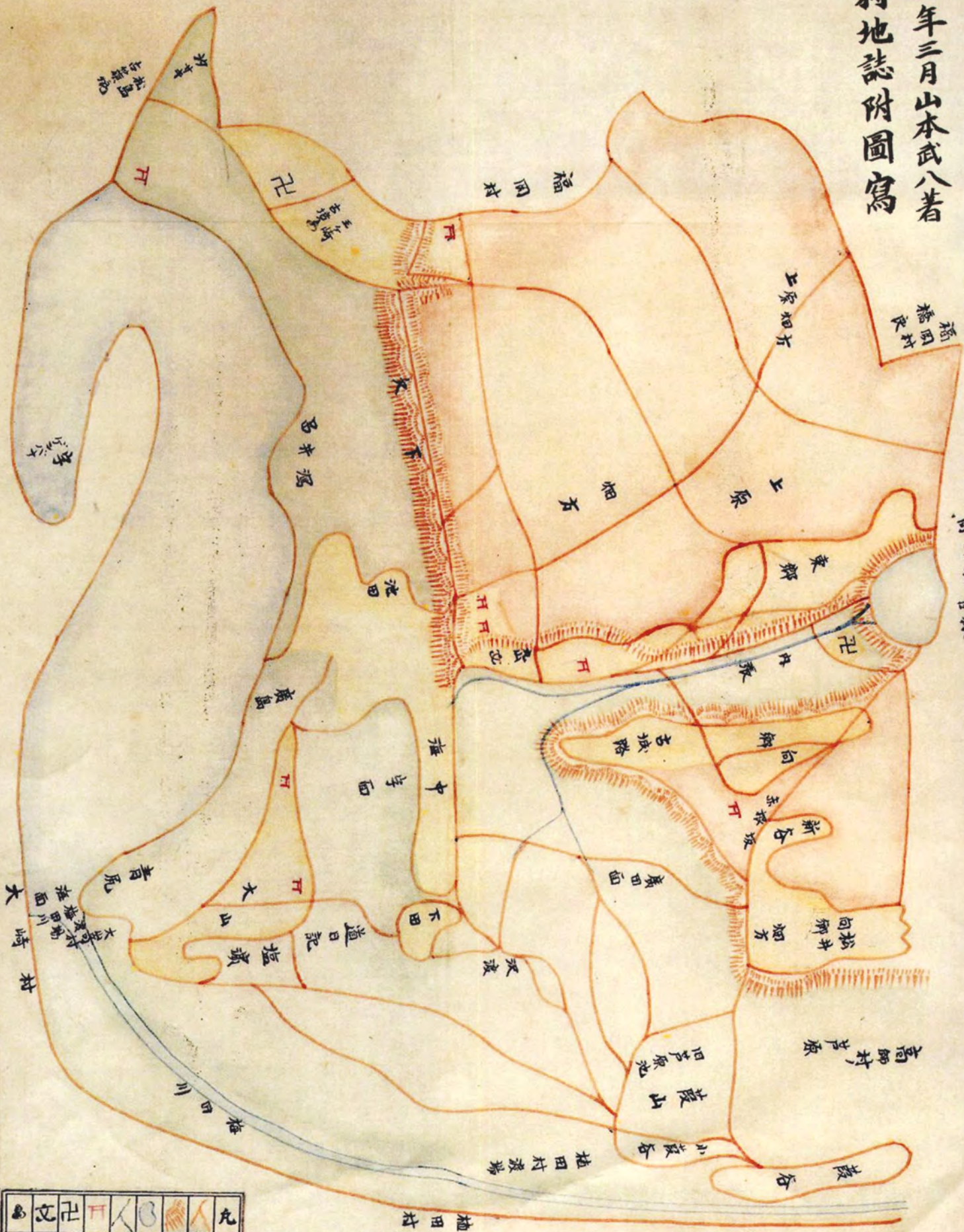
江戸時代末期の磯辺地域



社寺・川・池の名称は位置説明のために記入
(図中に薄く見える白線は昭和20年頃の道路・建物など)

磯辺小学校資料室 「駒形町 兵藤 良夫氏 寄贈」

明治十二年三月山本武八著
磯邊村地誌附圖寫



丸	例	道	池	河	神	寺	学	文
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

春日神社神主 鈴木 松太郎氏 彩色して写す

平成10年 磯辺校区航空写真



発刊によせて



平成 18 年度
豊橋市総代会長
西 義 雄

このたび、豊橋市制施行 100 周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100 年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51 校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた 100 周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この 100 周年記念事業を一過性のものにと終わらせるのではなく、次の 100 年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。



平成 18 年度
磯辺校区総代会長
内 藤 公 夫

豊橋市制施行 100 周年記念事業として、「校区のあゆみ」を発刊することが出来ましたことは、誠に意義深いことであります。

編集委員のひとりとして校区内の神社仏閣を始めとして、今まで通ったことのないような道を訪ねました。その先々で新たな発見があり、感動を覚えました。ご先祖様たちは艱難辛苦に耐え、後々の住民のために生活してくれていたことを実感いたしました。

当地の歴史を知るには、古文書によらなくてはなりません。明応 7 年（1498）6 月の大地震を始めとした諸災害等により紛失してしまいました。

山本武八氏（大山町）が明治 12 年（1879）に作成した『草間区地誌略』には、地理・歴史・人口等について詳細に記録を残してくれています。今回の発刊に大変に参考になったことは言うまでもありません。また、校区内にお住まいの長老からは、貴重な体験談やお持ちの書籍・写真類を拝見させて頂くことにより、多くの事実が判明いたしました。ご協力くださいました皆様に、心よりお礼申し上げます。

一軒に一冊お届けいたしますので、是非ともこの機会にご家族で見ていただき、「わが磯辺」を知り、見つめ直して、より住みやすい「ふるさと」になるようご協力ください。

目次

CONTENTS

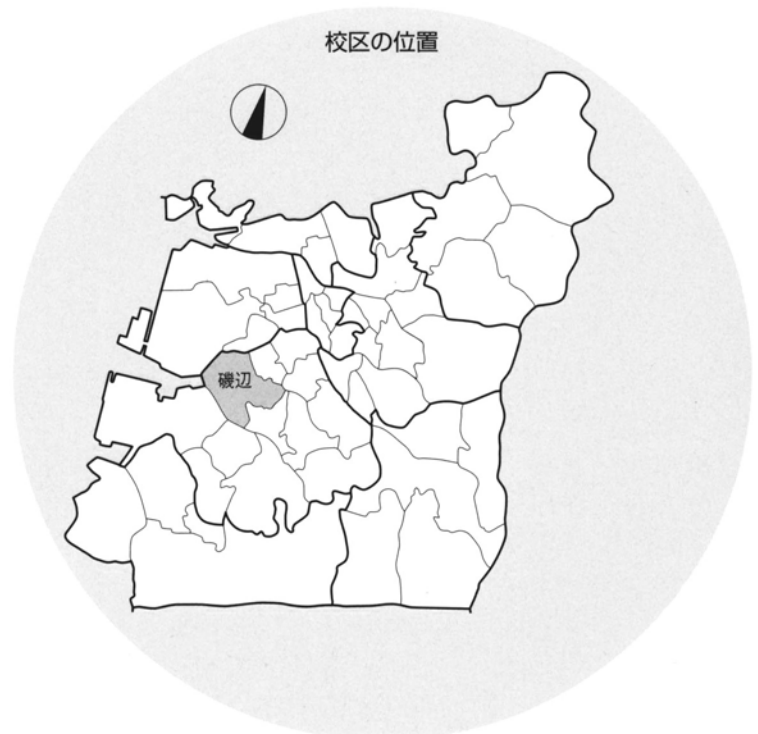
発刊によせて

目次

第1章 自然と環境	7
1 土地のようす	7
(1) 地形	7
(2) 地名の由来	8
①磯辺について	8
②昭和池について	8
2 気候と災害	9
(1) 気候	9
(2) 災害	9
第2章 歴史と生活	10
1 あゆみ	10
(1) 古代・中世	10
(2) 近世	11
(3) 明治・大正	13
(4) 昭和・戦争のころ	18
(5) 昭和・戦後のころ	20
(6) 昭和から平成へ	24
2 産業	26
(1) 農業	26
(2) 交通のようす	29
(3) 校区の活動	31
(4) 公共施設	32
第3章 教育と文化	33
1 学校教育・保育	33
(1) 寺子屋のようす	33
(2) 磯辺小学校のあゆみ	34
(3) 磯辺小学校の活動	37
(4) 南陽中学校のあゆみ	38
(5) 磯辺保育園・長栄保育園	39
2 社会教育	40
(1) 校区市民館・地区市民館活動	40

3 社寺と史跡	41
(1) 神社と寺院	41
①神社	41
②寺院	42
③水神	42
(2) 史跡・石碑・筆子塚	43
①史跡	43
②石碑	44
③筆子塚	45
(3) いいつたえ・いわれ	46
4 民俗	47
(1) 駒形共同浴場	47
(2) 善光寺講	47
(3) 大峯講	47
5 校区の人物	48
第4章 新しい時代へ	50
校区に関する年表	51
校区に関する参考文献	52
編集委員	52
編集後記	52

表紙 学校のシンボル「むくろじ」
兵藤寛司（駒形町）
題字 「校区のあゆみ 磯辺」
宮本敬子（草間町）



第1章 自然と環境

1 土地のようす

(1) 地形

私たちの住む磯辺校区は、豊橋市の南部に位置し南は渥美湾に流れ入る梅田川によって大崎校区・植田校区と境をつくり、東は高師校区・芦原校区に、北は中野校区・栄校区に接し、西は梅田川から柳生川の河口を結ぶ海岸線ならびに柳生川をもって牟呂校区・汐田校区に隣接している。したがって、南は梅田川にいたる水田地帯が、西は明治時代に開拓された神野新田が広がっている。

一方、北と東は標高 20m の広い台地続きで高師原台地の南西端に当る。この台地は、豊橋地方の母なる川、豊川の河岸段丘として形成されたものである。

この校区の中心である高台を南北に二分するかのように昭和池から内張川が流れている。これに対して、低地の方は豊川、柳生川、梅田川などの河川からの流出土砂の堆積によるもので、開拓により田畑になり、さらに宅地化が進み校区全体として 4000 世帯を超える住宅地となっている。

高台の地域は、地盤がしっかりしているが、内張川周辺を含む低地は、地盤も柔らかく地震への対策を心がけなければならない。

校区には、高台にある向草間町、磯辺中野、ならびに高台との境に位置する一色町、駒形町、王ヶ崎町、城山町、一色団地と低地に位置する大山町、二回、さらに大半は高台ではあるが低地の内張川を含む草間町など 10 の町内会組織がある。



昭和 30 年の地図

(2) 地名の由来

① 磯辺について

磯辺という呼称が正式に使われるようになったのは、明治11年(1878) 渥美郡磯辺村として草間、向草間、松島新田、上牟呂、中牟呂、下牟呂、松井新田、富田新田、上ノ原新田が合併した時である。明治12年大山在住の山本武八氏が著わした『草間区地誌略』によれば、この時の合併は大別して草間区と牟呂区との合併であった。この草間区は、草間、向草間、松井新田の三ヶ村を合わせて称したものである。草間区には、大山組、駒形組、王ヶ崎組、東郷組、向組、松井組の6組があった。草間区、牟呂区とも海岸沿いの村であることから、どちらにも甲乙のないように、新しく磯辺にしたのではとしている(『磯辺小学校100年記念祭 磯辺教育百年史』)。

なお、平安時代の頃に渥美郡に磯部郷という文字が使われていた地方があったが、これは現在の磯辺地区とは異なるとの見解もあり明らかではない。

また、鎌倉時代には草間郷の地名があり、その範囲は明確ではないが現在の磯辺校区に近い範囲のようであり、江戸時代後期には草間村、向草間村、松井新田になっていた。明治39年(1906) 8月1日豊橋町が市制になり、同月31日磯辺地域は渥美郡高師村大字磯辺となった。昭和7年(1932) 9月1日豊橋市に合併された時に、磯辺という地名は消えて、現在の各町名である草間町、向草間町、王ヶ崎町、駒形町、大山町、一色町、中野町、松井町などになったが、城山町は昭和37年(1962)に向草間町からわかれた。なお、二回地区については、昭和7年のとき牟呂吉田村から現在と同じ神野新田町になった。神野神田開拓は明治29年(1896) 4月に完工式が行われ、その後、三郷、五郷、二回の3つの区に分けて耕地整理が進められた。

二回地区が磯辺校区に入ったのは、明治35年(1902) 3月私立神野尋常小学校が廃校となり、磯辺尋常高等小学校へ通学区変更となったときからである。

このとき三郷と五郷は牟呂尋常高等小学校へ通学することになった。

なお、二回という地区名は、神野新田開拓時に1回目の開拓では土壌に塩分が多く残っており作物が取れなかったことから2回目の開拓に取り組んだので、これに着手した神野金之助氏が名付けたといわれている。

② 昭和池について

昭和池は、江戸時代の吉田藩領内絵図(1820年頃のもの)に草間村の溜池として杓子池の名で載っている。

この池は、昭和4年(1929)に内張川の上流に、それまであった杓子池(呼称しゃもじ池、別名三ツ池で上池、中池、新池3つの総称)を耕地整理と併せて大規模な工事を行い、農業用溜池として整備し昭和池と名付けられた。戦前までは、高師原の雨水が水無川を流れて流入していたが、戦後は日紡(現ユニチカ)の進出や宅地化が進み汚水が多く流入し農作物に被害が出るようになった。

農業用の目的であることから、豊川用水の導入が検討された。それに伴ない溜池を1/3に縮小し、埋め立



昭和池完成 昭和7年

てた部分を公共施設の建設に当てることが決められ、昭和46年(1971) 9月埋め立てが始まった。なお、地元の所有であった池を、豊橋市に寄付したことから埋め立てた土地の一部が地元へ換地され、今は畑と住宅地となっており、埋め立てられた所に、市営草間住宅2棟と愛知県豊橋勤労福祉会館(愛称アイブラザ)が建設され昭和51年7月に完成した。

2 気候と災害

(1) 気候

豊橋市の平成15年度の気象観測データによれば年平均気温16.1度、最高36.2度、最低-2.7度であり気候温暖な住み易い地域と言える。平均風速は3.3m/s、風向は西北西、最大風速台風時の28.8m/sであるが、年間を通しては1月～4月と10月～12月は風向が西北西で月の最大が21～26m/sと、いわゆる空っ風が吹く地方である。

また、降雨日数124日、降水量1775.5mmであった。この15年度のデータは、この地方の平均的気象を表わしている。

(2) 災害

この地方の災害は、気象に関連する水害と干魃^{かんぼつ}ならびに地震によるものと大別できる。

① 水害と干魃

『愛知県災害誌』に記録されている西暦701年以後風水害と干害の繰り返しであった。この地方では文化5年(1808)暴風により70余戸が倒壊、翌年飢饉になるなど水害が繰り返された(『草間区地誌略』)。詳細は「近世」の項参照。干害は、昭和43年豊川用水が完成してからは発生していない。一方、水害は集中豪雨による場合と台風による場合とが記録されており、昭和の大きな水害は次の2つである。

13号台風 昭和28年(1953)9月25日夕方、紀伊半島を横切って伊勢湾から知多半島に上陸、碧南市、岡崎市の南を通り北設楽郡田口町(現設楽町)を経て長野県に去った。台風の目の南東に当たるこの地方は、暴風雨と同時に高潮に襲われ、柳生川、梅田川の決壊と併せ、神野新田の海岸線の堤防も決壊した。この時、豊橋市全体



二回地区の水害のようす

では、24000人もの被災者があった。

当校区では、死者は無かったものの稲作と養魚場が全滅し、避難生活が2ヶ月にもなった。
伊勢湾台風 昭和34年(1959)9月26日夕方、紀伊半島潮岬に上陸、奈良から鈴鹿山脈を通り、岐阜から北陸へ抜けたが、鈴鹿付近で気圧が、945hpaと最大級のもので台風の目の南東側に当たる、名古屋、知多半島の各市町村とともにこの地方も300mmの大雨と高潮が重なって大きな被害が生じた。

② 地震

地震についても、西暦715年から記録があり東南海沖を震源として、M8を越える地震がたびたび起きている。この地方にとって影響の大きかったのは次の4地震であった。

宝永地震 宝永4年(1707)震源地 東南海沖 M8.4、吉田城の本丸御殿の倒壊、吉田宿の町家全1011軒の内、全半壊585軒など大きな被害があった。渥美郡では、大津波が襲い多くの人々が亡くなった。

安政地震 嘉永7年(1854)震源地 遠州灘東部 M8.4、同年は安政元年にも当り、その後も地震が続いたことから安政地震と言われている。家屋の倒壊は関東から東海地方中心に広く、大津波も発生して海岸部は房総半島から四国南部にわたって被害があった。

東南海沖地震 昭和19年(1944)12月7日震源地 熊野灘沖 M8.0 津波は発生しなかった。

三河地震 昭和20年(1945)1月13日震源地 渥美湾 M7.1、この地震は、上記東南海地震の余震の一つと考えられている。戦時中であり詳細は不明な点が多いが両地震での死者は全部で3530名、家屋の全半壊7700戸と記録されている。

いずれにしても、この地方も大きな地震が発生する可能性があるため、地震時の対策を考えて置かなければならない。

第2章 歴史と生活

1 あゆみ

(1) 古代・中世

古代

当校区には、古墳時代（今から1300年～1700年前）後期に築かれた規模の大きな首長墳とされる円墳、磯辺王塚古墳（王ヶ崎町）がある。校区内で唯一の古墳で、現在は看板と発掘された石があるのみである。出土品の飾太刀を中心に太刀・馬具・須恵器等が、豊橋市美術博物館に展示、保管されている。

また、装身具には、金メッキされた耳飾りや首飾りに使った玉類があり、当時の人々はこれを身に付けて自分の権威を示していた。駒形には古くから貝塚があったという言い伝えがあり、また上ノ原（現在の中野町辺り）では、石器が発見されていることから、先史時代に磯辺には既に人が住み、現在の中野町付近の森や林を駆け廻り狩猟を行い、駒形町の海辺では、魚、貝、海藻類を採り、それらを食べて生活していたようである（『ふるさといそべ』）。

旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代へ、そして、今から約1300年～約800年前の飛鳥、奈良、平安時代を総じて「古代」といわれている。

本格的な仏教寺院が建立されたのが飛鳥時代で、代表的な寺院として法隆寺、三河では市道遺跡いちみちいせきで知られる寺院跡（市道廃寺）、神社には菟足神社うたり、砥鹿神社とが等の寺社名が示されている。

東三河では豊川の右岸に宝飫郡ほお、左岸の朝

倉川以北に八名郡、その南部及び渥美半島に渥美郡が置かれた。

渥美郡内の郷として、幡太郷はだ（主に羽田町）、飽海郷あくみ（主に八町付近）、高廬郷たかし（高師から天伯・二川）、磯部郷いそべ（老津・杉山から太平洋に至る地域）があった。磯部郷については、現在の磯辺地区（旧磯辺村）にあてはめる説もあるが、太平洋岸の伊古部とする説もある（『豊橋市史 第一巻』）。

人間は自然と深く関ってきた。人々は土地を守り、村落を守護することから自然発生的に聚落しゅうらくが起こり、農耕生活が進展するに従って、自然崇拜へ、そして「神」を祀るようになった。

『三河国内神明名帳』には正五位下「葦間天神くさまの」と同「磯部天神」が記載されているが、「磯部天神」の所在は、上記のように磯部地域自体が明確ではないことから、当校区内と決め難い。

現在、草間町春日神社境内に「葦間天神」の石碑があり、また駒形町本宮神社にも「草間天神」がある。春日神社の棟札によれば、寛永3年（1626）造営とされているが、奈良の春日大社よりの勧請はそれより以前とされている（『春日神社御由緒考』）。

住民の崇敬の象徴として氏神様を造営し、崇拝する事により、生活面、精神面等あらゆる面で、感謝し、参拝、お守りしていたのである。

本宮神社は、初め綿津見わたつみの三柱を祀り「葦間天神」とあるが「葦」は「葛」の字の誤りではないかとしている（『草間区地誌略』）。

中世

今から約800年前から約550年間、鎌倉や京都に幕府が置かれた時代を「鎌倉時代」・「室町時代」と呼び、「中世」としている。

これまでの律令体制から、武士による封建的な政治へと変わり、領地を与えられた武士たちは在地的支配を進めていく。領地を守るために各所に城を築き、周囲に堀や土塁を巡らした構えを拵えた。

三河国でも、古城や古屋敷が文献・伝承・地名などに表れる。今川義元いまがわ よしもとに従った東三河の主な土豪として畔田惣五郎くろだ そうごろうの名がある。田原から豊橋南部の梅田川流域にかけて、畔田という豪族が寛正年間（1460～'66）に居住し勢力を保持していたことが推測できる。畔田氏は畔田城（別名赤沢城）を本城として、草間城きじやま、雉子山城なかせこ、中瀬古城うえちなど一族を配置し、勢力の伸長を図っていた。

草間城は戦国時代の始め、この地の土豪の芳賀七郎の居城で、今川氏に属していた。後に畔田城を本拠としていた畔田監物くろだ けんもつが代わって居城、この地方に勢力を張ったと伝えられている（『渥美郡史』）。

(2) 近世

長く続いた群雄割拠の激しい戦国時代（1467～1568）は、安土桃山時代（1573～1600）を経て、慶長5年（1600）関ヶ原の戦いで終止符を打たれ、慶長8年（1603）徳川家康とくがわ いえやすが江戸に幕府を開き、江戸時代265年間に移行する。

徳川家康から15代將軍慶喜よしのぶまでの265年間にわたっての江戸幕府が進めた政治は、平和な時代を生み、文化の成熟が見られた。

人口の増加、消費量の増大により物資輸送は、海上輸送が陸上輸送を凌ぎ発達していた時代がある。豊川、梅田川流域に湊を置き、物流基地、また、旅人を運ぶ船便も増えた。

このころ牟呂との小競り合いが多く生じた。

梅田川河口付近から豊川河口付近の海面は400余年前の領主池田輝政いけ だてらまさ（在城1590～1600年）によって、牟呂をはじめ沿岸15ヶ村は共同利用を認められ、年々、米33石を運上として納めていた。ちなみに、牟呂は17.6石、草間・小浜は2.4石を納めている。従って漁場の発言権は牟呂が強く、魚介類や海藻の採取日は牟呂が決めて関係の村々へ通知していた（『牟呂史』）。

漁場の紛争の一つは、延宝8年（1680）草間村の人々が肥料にするために藻草を採取したことに關してであった。また、渡海についても紛争があった。駒形町・本宮神社より低い所はほとんど海であり、内張川に沿って入り込んでいる所が草間・向草間であり、この地形が海上輸送を盛んにしていたようである。遠江・駿河などからの伊勢参りの旅人は船町から乗船するようになっていたが、いつの頃からか船町以外の海辺の村からも船を出していた。特権を侵害されたとして、役所へ訴え出るのが常であった。

牟呂からも船を出し、近辺の村々へ客引きに出ている。船町から草間村へ見張りに来た者は、草間村からの報告に「草間村からも乗り出している」とあり、文化11年（1814）には、大崎村に程近い草間村からも伊勢渡海の船を出していることがわかり、直ちに中止を命ぜられ、庄屋太七は押し込めとなつた（『豊橋市史 第二巻』）。地元はもとより遠江方面からの客を扱っていたのであろう。

交通・通信整備は、国土を支配する目的、手段として重要視され、江戸時代には五街道（東海道、中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道）の一つである東海道に宿駅が慶長6年（1601）に設置された。これが東海道五十三次（品川～大津）である。

特に東海道は、江戸と京・大坂を結ぶ全里程約125里（500km）にも及ぶもっとも主要

な街道で、街道筋には江戸防衛のため多くの譜代大名が配置された。豊橋市域には、吉田・二川の二宿が当初から設けられ、物資輸送と幕府役人の通行のための人馬を提供させる伝馬制を確立した。

慶長9年には、街道を行き来する人馬が正確な距離を知る目安とする一里塚を築いた。二川宿には、人馬継ぎ立てや荷物の継ぎ送りなど、交通輸送を業務とする問屋場が2ヶ所あって、大名、公家など特別の大通行の場合は、問屋役人全員が出勤して御用を勤めた。参勤交代制の確立後、公用人馬の需要増に応じて、宿駅近傍農村への助郷の指定が漸次恒常化し、助郷制度が設定された。

定数の補助人馬を課せられた郷村を定助郷、臨時の大通行に應ずるものを大助郷と称した。元禄7年(1694)の『二川宿助郷帳』には、大助郷として草間村の名が16ヶ村のうちの1村として記されている。しかし、村々には負担は重く紛争は長く尾を引いた。「触れ当て多く困窮」として、寛政6年(1794)二川宿問屋平兵衛外3人を相手取り、二川宿助郷三州高足村33ヶ村惣代草間村孫兵衛・牟呂村彦十・小浜村金三郎が江戸へ赴いて道中奉行に訴訟を起こした(『豊橋市史 第二巻』)。

公用の荷継ぎに対する駄賃は低く、また、交通量の増大期が農繁期と重なったため、助郷役は農村を疲弊させ、百姓一揆の原因ともなり、明治5年(1872)に廃止された。

掃除丁場として、東海道往還通りの掃除は、街道沿いの宿村を中心に、多くの村々に割り当てられた。草間村が割り当てられた区間は、吉田宿から御油宿までの2里22町(10.254km)が87区画され、その一区画の掃除を受け持った。下五井村往還12間(22m)掃除区間迄の距離2里18町(10km)、小浜村は29間(52m)で掃除場迄は1里16町(5.7km)。草間村は10km離れているが、「重き御通行」のある

たびに掃除に赴いていた。これは助郷の人馬勤めとは別であり、農繁期といえども見合わせることは出来ず、金銭を以ってこの任務を請け負わせる村もあったとのことであり、それだけ担当している村には負担となっていた。

一方、小物成(税)として、染料・繊維・油・塩・雑貨も定められていた。

椿郷(現在の草間町)と言われた一带には椿の樹林が広がっており(屋敷を護る防風林を兼ねた)、この椿の実が椿税とされた。また、享保14年(1729)に海水から塩を作り始めていたこともあり、塩も椿も税の対象となり金銭で納めていた。

〔災害の記録〕(『草間区地誌略』より)

明応7年(1498)6月11日に大地震があり、続いて25日の辰の刻(午前8時ころ)にも大地震があり、大津波によって海辺の多くの人々が住まいを破壊された。この時に古書や古器物、その他の物品が流失してしまったことから、これより以前のことは判らなくなった。

寛永19年(1642)の春に飢饉により全国的に餓死者が多く出た、また病気も流行した。

延宝3年(1675)にも飢饉があり、さらに6年後の天和元年の飢饉が翌年の春まで続き餓死者が多く出て、夏には疫病も大流行した。

宝永4年(1707)10月4日に大地震(宝永地震)があり、津波が海岸に打ちよせ堤防を破壊し品井潟・広嶋などに流れ込み、砂浜になってしまった。

天明5年(1785)4月から5月まで気候がひどく冷えたため人々は綿入れを着ていた。同7年3月大雨により麦作は熟すことが出来なかったため、米価が高騰した。

文化5年(1808)に、暴風により草間村では70余戸が倒壊した。翌年には飢饉があった。

天保13年(1842)8月13日の夕暮れに暴風雨により、現在で言うところの高潮が発生し、

海辺の住民は大きな被害を受け、米は不作であり翌年の春は飢饉であった。

安政元年（1854）11月4日に大地震（安政地震）の津波によって草間村の海岸は決壊してしまった。

〔新田開発〕

戦国時代の戦乱の終息から民力の回復・人口増加等により荒地を開拓し、新田開発が進められた。当校区内では現在の中野町・王ヶ崎町辺りに当る上ノ原新田がある。ここ上ノ原新田は高師原台地から駒形町へと西方にのびる台地で、山林や原野を開発したもので、畑地である。現在の地名としては、県営王ヶ崎住宅のある字名として「上原」があり、宅地化されたことにより農地面積は字の半分以下となっている。

上ノ原新田は、草間村に隣接した牟呂村支配の松林を開発したものである。開発年次は不明であるが、延宝7年（1679）の免状があることから、それ以前と推定される。石高は延宝7年に48石1斗8升6合、その2年後の天和元年（1681）に67石5斗3升3合となり、貞享年間（1684～'88）に漸次増加して、元禄3年（1690）には、117石1斗6升8合となって幕末にいたっている。天保4年（1833）、幕府の開発計画に刺激された吉田藩では富久嶋新田・牟呂村・草間村地先の干拓計画を立てた。計画の中心となった福島献吉の計算では、牟呂方面で732町余、草間方面で54町余の耕地を得られるはずであった。しかし、これに影響を受けるのは地元の牟呂村はじめ前芝・平井・日色野・伊奈・梅藪・横須賀・小浜・草間・向草間・羽田・野田・三相・馬見塚・吉川村の計15ヶ村と、高須・松嶋・青竹・藪下・清須の諸新田であり、いずれも牟呂・草間村の地先の海面・干潟に入会って、魚鳥類・貝類・藻草などを採取していた。この開発計画が進むとこれらの海稼ぎ

の収入を失い、藻草肥料の採取が不可能になるほか、水害の恐れが増大、舟付場もなくなるとして、藩に開発の中止を訴えた。藩も計画を再吟味の上、計画を白紙に戻した。

江戸時代中期以降、新田開発が一帯で行われるようになり、河口部だけでなく内陸部でも溜池と併せて新田づくりが進んだ。後期には、藩自ら新田開発に乗り出した。

〔おかげまいりとええじゃないか〕

江戸時代末期の庶民の旅は、社寺参詣や物見遊山などが多く、四国の金毘羅さんや北陸の立山霊山詣など遠くまで出かけた。この地方も明和8年（1771）には伊勢神宮参りが盛んで、これを「おかげまいり」と言っていた。草間地方では天保元年（1830）にお札が降下したという（『草間区地誌略』）。

慶応3年（1867）牟呂村で端を発した「ええじゃないか」は、伊勢神宮のお札が降ったことが契機となり、村中が臨時の祭礼を行い全国に広がったという。この頃草間村にもお札が降り、一色では3日間狂言奉納があった。

（3）明治・大正

明治維新は、それまでの徳川幕府の武士の政治から脱却する大変革の幕開けの時代だった。

明治時代になった磯辺校区の様子はどうか。ただろうか。「磯辺」という名称を中心に校区の変遷をたどってみよう。

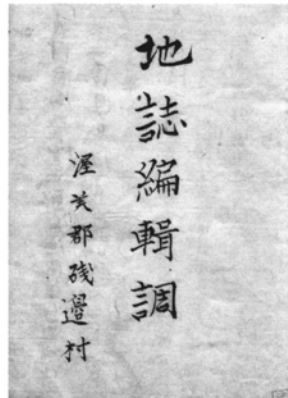
明治11年（1878）までは、まだ磯辺という呼び名はなかった。江戸時代の名称がそのまま使われていた。当時は、草間村・向草間村・松井新田・上ノ原新田が今の磯辺校区にあたる所で呼ばれていた呼称であった。今の一色町、駒形町、大山町、王ヶ崎町は草間村の中に含まれていたのである。

明治4年（1871）7月、明治政府は廃藩置県を断行、府県官制・県治条例を定めた。また、布告170号で戸籍法を制定し全国を統一的に支配するための諸策を実施した。

明治11年（1878）郡区町村編制法が公布された。この法律の施行にともなって磯辺校区の村々も整理統合されて新しい村「磯辺村」が誕生した。この磯辺村は、今は牟呂校区で当時、上牟呂・中牟呂・下牟呂・富田新田・松島新田の村、新田と草間・向草間の2村、松井新田・上ノ原新田の2新田を合わせての磯辺村が生まれた。この時の磯辺村は草間区と牟呂区の2つに大別されていたので、両区とも海岸線にあったことから、どちらにも適用する磯辺と名づけられたのだろう。

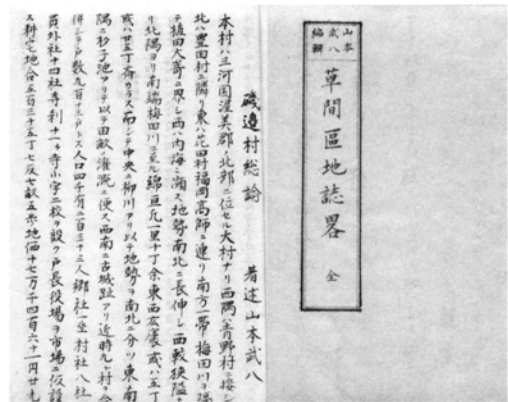
明治15年（1882）に著された『渥美郡磯辺村々誌』には、「・・九村タリ、明治九丙子合シテ一村トナシ改メ本称（注 磯辺村）ヲ用フ・」とある。磯辺という呼称の発生について、前記『磯辺村々誌』には、明治9年

（1876）とあるが、県の記録には明治11年12月28日とあり整合性に欠けるが、磯辺周辺の村々の様子や政府の郡区町村編制法の公布（明治11年）の実状から考えると、県の記録が正しいものと考えられる。



渥美郡磯辺村々誌の表紙

思うに、新村編制の動きは実際には明治7年頃からあり、新村名を決めるにあたり、草間区と牟呂区との間で何らかの交渉や駆け引きがあったのではなかろうか。この間の経過を示す記録がないので今の段階では何ともいえない。この時の磯辺村の戸数、人口について、大山町の山本武八氏が著した『草間区地誌略』（明治12年）によると、「戸数九百十三戸、人口四千有二百三十三人」とあり、前記『磯辺村々誌』（明治15年、調査は明治9年）には、「戸数八百五十九戸、人数四千百二十九口」とある。



草間区地誌略 表紙および磯辺村総論

戸数、人口に多少の差異があるが、これが磯辺村の実態である。明治11年12月28日に、我が校区「磯辺」の呼称が誕生したのである。さらに、明治12年（1879）8月には、小学校名も草間学校から磯辺学校となり、現在地に移転している。この磯辺村の時の草間区の呼称について、『草間区地誌略』に「今此区ヲ六組ニ頒テ・・・大駒締（大山組カ？）、駒形組、王ヶ崎組、東郷組、向組、松井組トス」とあって、一色組は記述されていない。本書の後段にそれぞれの郷誌が書かれているが、そこには「一色誌」が載っている。因みに郷誌には、大山、駒形、海中、丸山、一色、王ヶ郷、東郷（椿藪）、向郷（向草間）、松井の九郷が記載されている。

以下、郷誌を掲載する。明治初中期の様子が見える。

○ 大山誌
 大山ハ東ニ田畝^{でんぼ}(*1)ヲ隔テ海中ト相對ス 西南ハ梅田川ヲ隔テ大崎村ト相對ス 北ニ稍^{はや}田野^{でんや}(*2)アリテ海ニ瀕シ(*3)牟呂区ノ市場ト遙對ス本郷反別十三町九反八畝二十五歩 戸数四十戸 人員二百二十二人 皆農耕ヲ勤ム 本郷ノ南端梅田川ニ添テ塩浜アリ其地所有ノ人食塩ヲ煮年内多ク産出ス 農船二十艘農車追々購求ス 該地ハ当区第一ノ低地ニシテ海^{かい}嘯ノ患(*4)多シ 東端ニ村社アリ塩釜神社ト号ス本社ヨリ北エ三町離レテ字松荒ト言アリ

爰ニ員外社素佐之男社遷坐ス 本郷ノ姓山本伊藤中島加藤稲垣等ニ過ス 宗教ハ臨濟宗曹洞宗トス(*1 田畑、*2 田、野原、*3 近く、*4 大波による被害)

○ 駒形誌

駒形ハ東丸山ト唱本宮山アリ 南ハ海中ニ接シ西ハ海ニ瀕シ北ハ田野ヲ隔王ヶ崎ト相對ス 郷中ヲ三分シテ南ヲ道南ト言 中ヲ駒形ト言 北ヲ道北ト言(一名池田トモ言) 反別八町六反八畝二十二歩 戸数四十戸 人員二百三十七人 大略農業ヲカムト雖モ飲食店酒類菓子店等アリ 較塩ヲ煮ル姓中島加藤中村兵藤村田山形三浦佐藤榊山等アリ宗教ハ臨濟真宗浄土等ナリ

○ 海中誌

北ハ駒郷ニ接シ西ハ田畝ヲ隔テ大山ト相對ス南較隔テ下田郷アリ四方田野ニシテ島形ヲナスヲ以テ名トス然レ共海中ニ併ス 反別三反八畝四歩 戸数僅二戸 人口十三人 姓中島宗旨ハ臨濟宗ナリ東ハ広田面(*1)ト唱一望スル事五十八町余本郷反別三町六畝三歩 戸数十戸 人口五十七人 姓山本加藤中島等ナリ宗教臨濟曹洞真宗トス(*1 たんぼのこと)

○ 丸山誌

丸山ハ東一色ニ接シ南ハ田畝ニ望ミ西ハ駒形ニ界シ北ハ上原トス其形東西ニ長ク恰モ一字形ヲナス 各居宅ノ背ニ丘陵ノ屏立ヲ負ブルヲ以テ土人凍寒ノ患ヲ知ラズ方今此地ニ小学校ヲ開設シ陰後丘陵ノ地ニ本宮神社アリ 当区第一ノ風景絶佳ナリ 人アリ社前ノ苔石ヲ床トシ以テ南方ノ万頃ヲ望ニ稻禾蒼々トシテ宛モ桑海ノ如ク又西方ヲ望ニ海波瀾激岸山映潮遠嶼如瀉漁歌侵耳海天一色風景如画(*1) 人之ヲ望ニ恰モ一漁夫流水ニ沂(沂?)リ桃源ノ洞中ニ入テ帰ルヲ忘ルモ宜ナリ歌ニ

見渡せば 波は霞の 海原や

衣かうらの けふのしつけさ

中昔此近傍ニ金剛山長福寺アリ(長栄寺ノ事カ)土人口伝ノミ今其旧跡不分明ナリ 反別

三町八反一畝三歩 戸数八戸 人口三十七人 姓兵藤中島山本等ナリ 宗教ハ臨濟曹洞トス(*1 風景の良いようすを表している)

○ 一色誌

一色ハ東北上原ニシテ南ハ田畝ヲ隔テ向郷ノ村社古城址ト相對ス西ハ丸山ニ接ス本郷ノ北ニ八幡宮アリ東端ニ長栄寺アリ 反別四町四反一畝十五歩 人家稠密(*1)ナル事本区第一トス地形温暖等丸山ト相伯仲ス 戸数三十六戸 人口百五十八人 姓中島最多シト雖モ内藤牧田坂牧山本等アリ 宗教ハ臨濟曹洞浄土等アリ(*1 ひしめきあっているようす)

○ 王ヶ郷誌

王ヶ郷ハ東福岡村ノ小浜ト少カニ道路ヲ隔ツルノミ南ハ上ノ原ニ接シ西ハ品井瀨ニ瀕ス北ハ牟呂区ノ松島ト相對ス郷ノ中央ニ阿弥陀寺アリ其南ニ古墳アリ土人曰ク古昔王子此地ニ薨セシト依テ此地ヲ王塚ト称(シカレ共何王子タルヲ知ズ)東端ニ火穴アリ乾(*1)ノ方ニ字霊屋アリ稍北エ離レテ字敵討ト言(今方言ニテチウチ)其北ニ村社アリ社傍ニ三国ヲ眺望スル事(本国尾張伊勢)頗ル絶佳ナリ 反別五町二反七畝十七歩 戸数二十六戸 人口百十二人 姓兵藤加藤伊藤ナリ 宗教臨濟曹洞浄土等ナリ(*1 西北の方向)

○ 東郷誌

東郷ハ一名ヲ椿藪ト言東高師村ノ官林ニ連リ南ハ向草間ト接ス西北ヲ上ノ原トシ郷ノ長坤(*1)ニ社アリ坤ヲ村社トシ春日大神ヲ祭レリ長ヲ員外社八幡宮トス南端ニ大応寺アリ北ニハ八幡ノ古跡アリ是三部郷社ノ跡ナリト言三方大門ノ形アリテ西方ニ二本松アリ(又鳥居松トモ言)道ノ両傍ニアリ方今(*2)之ヲ伐ス 反別六町五反七畝十七歩 戸数三十八戸 人口二百三十七人 大略農事ヲ一途トス往古此地ニ椿藪多キガ故ニ椿藪ト言フ椿実税ヲ納ムト言 姓内藤中西水口森寺杉浦古溝鈴木芳賀等ナリ 宗教ハ真宗曹洞等アリ 本郷ト

向郷トノ中間ニ定入三昧ト言埋葬場アリ予(*3)此地ヲ巡視スルニ定入ノ石牌アリ其図ヲ記ス〈図略〉是ヲ水口傳六ノ先祖トモ言亦其家絶シテ後傳六其後裔ヲ興セシトモ云(*1
北東、南西の方向、*2 最近、*3 山本武八自ら)

○ 向郷誌

向郷ハ以前向草間ト言一村名ヲ負担セシガ元来草間村ト雜居ノ郷ナリ東ハ高師村ノ官林ニ接シ南ハ畠ヲ隔テ松井ト相對ス西ハ官林ニシテ旧城趾アリ黒田氏はニ居ル西北ニ一色郷アリ城址ニ員外社アリ稲荷ヲ祭レリ東ニ較隔テ村社アリ亦郷ノ中央ニ東光寺アリ郷形東北ヨリ西南ニ長ク反別八町五反七畝十三歩 戸数四十一戸 人口百九十九人アリ此地高燥(*1)ニシテ井泉ニ乏シク郷陰田歩ノ際ニ泉水涌出シ土人以テ是ヨリ飲水ヲ担フ 姓藤田小野田彦坂伊藤加藤市川小林大竹等ナリ宗教曹洞遼宗等ナリ(*1 高く乾燥している)

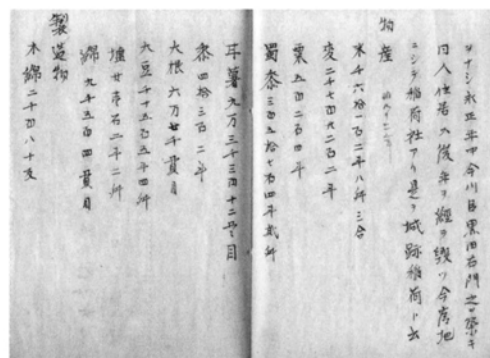
○ 松井誌

松井ハ東高師村ノ芦原ト接シ南梅田川ヲ隔テ遙ニ植田村ニ相對ス西ハ二等道路田原ニ通スル道ニ添フ北團ヲ隔テ新谷ト對ス乾位ヲ赤根坂トス本郷最高シ故ニ俗ニ呼ビテ上松井ト言下ヲ芦原ト言 上松井ハ水ニ乏シ下ヨリ清水ヲ担フ反別三町二反二畝二十八歩 戸数二十壹戸 人口百十三人 本郷ハ高師村交換ノ郷ニシテ旧芦原松井草間雜居ノ地ナリ又乾位ニ郷アリ俗ニ之ヲ赤根坂ト言本区第一ノ繁華ノ地ナリ 其東ニ新谷ト言アリ 合反別壹町七反八畝三步 戸数十三戸 人口三十四人 本所ハ農商兼多シ酒類飲食桶屋鍛冶職鉛製造大工等アリ姓ハ彦坂伊藤加藤大竹兵藤中村篠原尾崎鳥居アリ宗教ハ臨濟真宗真言宗等アリ

明治17年(1884)8月、磯辺村の再編があり、従来、の磯辺牟呂区は牟呂村となり、磯辺村草間区が単独で磯辺村となった。村の改編

後も磯辺村内の郷の呼称はそのまま継承されていった。明治39年(1906)8月には、また村の改編が行われた。磯辺村は周辺の福岡村、大崎村、植田村、野依村、高師村と合併して渥美郡高師村となって、村名としての磯辺はなくなった。しかし、高師村大字磯辺字向郷のように、大字として磯辺の呼称は残り、郷名の呼称も字名として存続することとなった。なお、小学校の校名の磯辺はそのまま残されて現在にいたっている。この後、高師村も昭和7年(1932)9月に豊橋市に合併し、大字磯辺はなくなり、それまでの「字」が原則として「町」となった。磯辺校区内の町名は王ヶ崎、大山、松井、一色、草間、向草間、駒形、中野、磯辺下地、神野新田(二回)の10町となった。磯辺の呼称は、わずかに磯辺下地町と小学校名に残るだけである。

明治期の磯辺の産業の様子は『磯辺村々誌』によると、「民業 全村男女トモ専ラ農耕ヲ



磯辺村々誌の物産、製造物の項

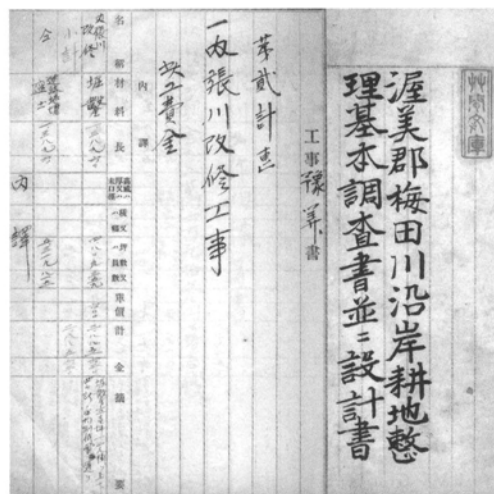
勉ム 女ハ其隙ヲ以テ機織ヲナス 男ハ其隙ヲ以テ漁獵ヲ成ス者アリ」とあり、農業を営んでいたことが解る。その産物として「物産 米 千六拾一石二斗八升三合 麦 二千七百二十二石二斗 栗・蜀黍・甘藷・黍・大根・大豆・塩 二十一石二斗二升 綿 九千五百四貫目」とあり、さらに製造物の項には「木綿 二千百八十反」とある。また『草間区地誌略』には「産物ハ塩木綿草履楊梅(山桃)柿枇杷蜜柑鱸(鰻)等ナ

り」とあり、産業としては米麦を中心として雑穀類の生産が行われていたようだ。磯辺校区では内張川流域から梅田川流域にかけての低湿地で米作と一部の裏作、上ノ原（上原）と草間、向草間、松井にかけての台地の部分での畑作が行われていた。しかし、この地域の地形は農耕地としては必ずしも適していたわけではない。台地の部分は土質は肥沃とはいえない上に、降水量はあっても低地へ流れてしまい、恒常的な水不足の状態であった。

また、梅田川北岸一帯の低湿地は“どぶ田”と呼ばれるほどの悪田で他地域の人たちに“磯辺の田はどうならあ”といわれていたほどだった。台地に降った雨水は一気に低湿地に流れ落ちて溜まってしまふのである。そのうえ灌漑排水の不備が悪水を溜めてしまうという悪循環が続くという状態であった。さらに加えて干天^{かんてん}ともなれば極端な水不足の状態になり、水稻栽培を不可能にしてしまった。こうした状態に腐心していた校区の先人たちは、昭和4年（1929）磯辺耕地整理組合を立ちあげ、翌5年から耕地整理事業に着手、昭和7年（1932）に工事が完了した。（大戦の影響もあり、磯辺耕地整理組合の解散は昭和27年（1952）となる。詳細は昭和の項参照）総事業費1073万円余をかけた大事業であった。現在、内張川流域一帯は住宅地となっているが、まだ下流域を中心に豊かな水田地帯が広がっている。

磯辺の耕地整理事業について、今までの記録に出てこなかった新しい発見があったので紹介する。それは、「渥美郡梅田川沿岸耕地整理基本調査書並ニ設計書 愛知県」（明治41年事業）というものである。

これによると、梅田川流域の住民、特に磯辺地域の住民は明治20年代から愛知県に対して、土地改良、耕地整理事業の要請をしていたのである。これらの要請を受けて、明治41



渥美郡梅田川沿岸耕地整理基本調査書、設計書 明治41年（1908）基本調査と事業実施に向けての設計書をまとめたのである。これによると、「概況」「土地及土壌」にはじまり「現今ノ用水組織」「現今ノ悪水組織」「降雨量」「地積」「土地改良計画」「土地改良後ノ用悪水量決定」「土地改良ニ依リテ得可キ利益」など20項目の調査・設計項目がまとめられている。明治期にまとめられた調査・設計書は、その後いろいろな事情ですぐには着工とはならなくて、結局、昭和になって御大禮記念の大事業として実施することとなったのである。明治期に作成された基本調査・設計がなかったら、昭和の耕地整理・土地改良事業はできなかったのではなかろうか。この意味で明治期の先人たちの先見性に敬意の念を払わずにはられない。

磯辺校区に関わる明治期における出来事として、明治41年（1908）に誘致した「第十五師団」がある。当時は渥美郡高師村大字磯辺と呼ばれていたが、現在の高師緑地公園一帯から南栄、富本、中野、草間、王ヶ崎町にかけて、師団の関連施設が設営されることとなった。

元の国立豊橋病院には衛戍病院^{えいじょ}、長栄寺の裏手の一帯には衛戍監獄、豊橋南郵便局から国土交通省豊川河川事務所、フランテ館、ユタカ自動車学校、マックスバリュウの一帯に



第十五師団配置図

は騎兵旅団、野砲聯隊、軽重兵大隊などが置かれ営舎が設営された。第十五師団設置に伴う兵営工事、練兵場の整備、道路整備（田原街道、大崎街道、牟呂港線）、下水道整備など磯辺校区周辺で大規模な工事が始まった。師団設置に伴い、駒形町には師団兵を当てこんだ銭湯（後、共同湯になる。別項で詳述）が開設された。また、上原や草間、向草間の台地の畑には師団から大量に出る糞尿、馬糞が投入されるようになると、それまで痩せ土で作物栽培に不都合をきたしていた土質が、見違えるような肥沃な台地と化した。

明治41年（1908）高師村一帯に進駐した第十五師団も大正時代になって、世界的な軍縮傾向の中で、大正14年（1925）3月に師団の廃止が発表された。一時は兵営前町として賑わった磯辺周辺の地域も僅か20年間で以前の農村に戻ってしまったのである。特に、磯辺の農家にとっては師団に依存していた「兵隊肥」と呼ばれた人糞、馬糞の肥料が入手できなくなったことは痛手となった。しかし、師団は廃止されたが、師団設置によって整備された諸施設は、その後も転用活用されたものもあった。磯辺地域では衛戍病院がその後陸軍病院となり、戦後は国立豊橋病院となり、平成17年2月に閉院されるまで、校区民には

長く親しまれた。また、病院の跡地へは豊橋市の総合保健センターが予定されている。寒村であった磯辺地域にとって、第十五師団がもたらした影響は大きく、変貌しつつある現在の磯辺校区を象徴しているようにも見える。

(4) 昭和・戦争のころ

昭和という時代は、戦争を抜きに語ることは出来ない。昭和2年（1927）中国出兵より昭和20年終戦迄の約20年間、小国の日本は多くの大国を相手に戦いを挑み敗れた。既に軍都であった豊橋市、昭和16年太平洋戦争勃発後の磯辺校区は北部に陸軍、南部に海軍に扶まれ町は軍事色を濃くしていった。

尋常小学校も国民学校に変わり修身授業が強化され軍神（軍功をたてた兵隊）講話や戦争映画の鑑賞が取り入れられた。その映像は子供に強い衝撃を与えた。

登校も朝各町の神社に全員集合し、清掃参拝後に隊列を組んで登校し、途中先生に合うと「歩調とれ 敬礼」の挨拶であった。

天皇儀礼が体に刷り込まれ、奉安殿への最敬礼、祝祭日の教育勅語奉読など学校生活は、天皇に始まり天皇に終わった。

子供達は、イナゴ取り、桑木皮むき、どんぐり拾い、落ち葉かき、慰問袋作り、また体操の時間は手旗信号、手榴弾投げ、竹槍と教練に力を入れた。

そして外地へ出征する兵士の見送りなど、皆規律を重んじる軍国少年となっていた。高等科を卒業した者は、青年学校（男子5年女子4年）に編入、実業が主で、本読みは従であり、時々軍人が来て軍事教練がなされた。少年兵や学徒動員として次々と駆り出されていった。

昭和18年（1943）には大崎に豊橋海軍航空隊基地（現豊橋市明海町）が完成し、海軍道路（現県道大山豊橋停車場線）も一直線に、大山から二回を経て豊橋駅まで建設された。

航空隊が開隊されると多くの兵隊が駐屯した。磯辺校区に陸軍、海軍の兵士が下宿した。殆どの農家の屋敷に兵隊が出入りし、賑やかになり兵隊と地元民の関係は緊密であった。

駒形町の本宮神社社務所に航空隊飛行長巖谷二三男少佐(マリアナ片道特攻指揮官)が下宿して居た。現在も町内に家族の住居がある。

磯辺小学校にも陸軍が駐屯し食糧不足のおり運動場の大半は耕され芋畑となった。

その頃、大山町の大崎街道沿いは松林が続いていた。燃料や航空部品物資弾薬分散隠匿確保に好都合のため海軍補給部が駐屯した。ドラム缶詰めのガソリンをポンプでタンクローリーに移し、航空隊まで運ぶ途中狭い大崎橋より川に転落、人身事故を起したりもした。集会所には袋に詰めた落下傘が多くあった。洲崎山(現ハートセンター西)の松林の中には野ざらしで魚雷が何本か置かれていた。

王ヶ崎町の欠下の崖には入り口と出口のあるコの字に掘られた、陸軍の地下壕1ヶ所(司令部)と海軍の地下倉庫3ヶ所があり、弾薬や食糧缶詰が保管されていた。昭和19年(1944)11月のB29爆弾投下は、これらを狙った空爆ではないかと言われた。

爆弾は、大山町に数発投下されたが、川や池、田畑に落下したため爆風で鶏舎のガラスが割れた程度で人災が無かったのは何よりであった。

昭和20年(1945)に大山町・駒形町が避難防空壕を本宮神社の崖下に掘った。その後崖上の神社が陥没し修理する羽目になってしまった。どの家も庭や裏山に防空壕を掘った。穴を掘り板を渡しただけのもの、丸太を打ち込み屋根にも丸太を組み防水土を被せた本式の防空壕などそれぞれであった。

昭和19年12月7日に東南海地震、同20年1月13日に三河地震が発生した。

三河地震後、余震が激しく家では眠れず、

町内どこも庭や畑に藁小屋を建て集団で1ヶ月程生活した。

昭和20年2月17日米軍の艦載機3機が豊橋海軍航空隊を空爆した。爆弾は整備所に命中し10数人の死傷者を出した。航空母艦よりの単発戦闘機の爆撃と機銃掃射で、本土決戦の近いことを予感させた。

中部・関西を爆撃するB29の編隊は、概ね志摩半島より進入し退去は岡崎から豊橋、浜松を経て遠州灘の洋上へ去って行った。

迎撃する日本の戦闘機が撃たれ、火を噴きながら降下して来て、梅田川の上空で空中爆弾を破裂させ、豊橋海軍航空隊(通称大崎航空隊)に帰還しようとしたが出来ずに畑に墜落炎上した。3月大都市が無差別爆撃を受け始めた頃である(名古屋市3月19日)。

昭和20年6月19日23時40分豊橋市にB29の編隊144機が超低空で侵入した。空気を震わせガラス戸を鳴らし焼夷爆弾しょういばくだんと焼夷弾を月夜の空にばらまき、一夜にして死者624名、家屋17000戸が灰になった。

磯辺校区では、大山町9軒、草間町6軒、王ヶ崎町7軒、二回2軒、全半焼を含め20数軒が被害にあったが幸い死者はなかった。駒形町、一色町、向草間町には被害はなかった。豊橋の空襲は低空飛行で行われたため、不発弾が多かった。王ヶ崎町の畑には六角焼夷弾(38発の子焼夷弾が落下の途中で分離着地、燃焼材を飛散させ、建物や人間を焼き尽くす)が束のままごろごろしていた。羽根車式時限信管が付いていたためと思われる。

大山町の民家の押入れに焼夷爆弾の不発弾が発見され大騒ぎとなった。

6月17日浜松市空襲、7月20日岡崎市空襲、7月29日浜松市艦砲射撃、8月7日豊川海軍工廠空襲と市街地も工場も無差別爆撃により焼け野原と化した。豊橋海軍航空隊も頻繁に艦載機の空襲を受けるようになった。

駐機していた日本の飛行機は、その度に日本海方面へ避難した。幾度も飛び立つ日本の飛行機の爆音、急降下する米軍戦闘機の爆音と機銃掃射など、磯辺校区上空の騒音は激しいものであった。学校も空襲警報発令で授業中断退校、登校即下校の時もあった。

夜は灯火管制で暗く、勉強は勿論、消火訓練や各種教練などもそれどころでなくなった。終戦前日の8月14日13時、渥美線が機銃掃射を受け死者15名負傷者16名を出した。たまたま乗り合わせていた磯辺の住民は、避難が早く難を逃れた。戦時中多くの兵隊や工員、一般人を運んだ渥美線は、車のなかった当時は磯辺校区としても重要な線路であった。

8月15日正午、天皇陛下の玉音放送を聞いた暑い夏の日、戦争が終わった。

この昭和戦争において尊い多くの命が失われ校区の忠魂碑（昭和10年3月10日建立、21年埋設、27年再建（発掘）、39年移設、平成4年5月13日現在位置校区市民館駐車場横に移設建立）に刻まれている。

磯辺校区戦没者の数は、次のとおり。

満州事変（昭和6年9月18日勃発）2名
支那事変（昭和12年7月7日勃発）6名
太平洋戦争（昭和16年12月8日勃発）148名
合計156名を数える（明治、大正の日清・日露・第一次世界大戦の76名を除く）。

昭和58年4月27日豊橋市遺族連合会平和の礎の資料によれば、遺族の転居等により140名（階級、戦功、没年、戦没地、軍歴、遺族住所等記載）となり、町別は次のとおり。

向草間 22名	大 山 21名	草 間 20名
駒 形 19名	二 回 16名	王ヶ崎 10名
松 井 9名	一 色 9名	城 山 9名
中 野 5名		

例年、磯辺校区慰霊祭を挙行し、平成17年度では129柱の英霊の供養をしている。

平成11年より市の慰霊祭は無宗教の戦没者

追悼式となり、今後この方向に進むものと思われる。どんな形にしろ、この戦争を「貴重な教訓」として後世に伝えて行かなくてはならない。

(5) 昭和・戦後のころ

昭和20年8月16日アメリカの飛行機が低空を悠然と飛んでいった。電燈と窓の黒い布が取り除かれ、部屋中が明るくなり涼しい風が部屋を通り抜けた。何とも言えぬ開放感を味わった。訓練飛行のため、毎日航空隊から飛び立つ凄ましい爆音の銀河陸上爆撃機の飛来はもうない。空襲警報や飛行機の爆音に耳をたて、声をひそめおびえて生活をしていたのが、うそのような平和の訪れであった。しかし、統制配給制は続き、食糧難は生活に深刻にのしかかってきた。磯辺校区は軍隊からの物資の払い下げも少なかった。盗み出した者が勝ちのような生活は、殺伐としたものへと変わっていった。校区はほとんど農家であったため、食糧難といっても栄養失調の人はいなかった。でも、ほとんどの家が泥棒に入られた。倉庫の米や着物、箆^{たんす}の背広、畑の野菜、種芋まで盗まれた。洲崎山では追剥まで出た。王ヶ崎町の欠下の横穴倉庫から砲弾を盗み出し、屑鉄化しようとして爆発、命を落とした者もいた。戦前、大崎島建設工事に徴用された朝鮮の人々が磯辺校区にも居住し、戦後は屑鉄商や芋飴製造で暮らしていた。芋飴のオブラート巻きを唾でとめて包装していた。鈴を鳴らし自転車で売りにきた一本3円のアイスクャンデーも、今は使用が禁止されているサッカリンとかズルチンが甘味料として使われていた。農家といえど米は貴重、麦をはじめ、さつま芋や豆を混ぜて炊いた。やたらと蠅が多かった。大人も子どもも食うためには汚いなんて言われていなかった。米穀通帳、衣料キップ、酒、煙草、砂糖等、配給統制の中で軍からの払い下げの軍服、戦闘帽、

軍靴を履き、自家製パン焼き器、手巻き煙草、どぶろく醸造、さとうきびしぼり等、人々は物がなければなりに考案して生活を維持していった。

戦後、髪にも衣服にもシラミがついた。米軍の援助でDDTが配布され、女子は頭が真っ白になった。このDDTも今は使用禁止である。「欲しがりません勝つまでは」と教えられて育てられた軍国少年にとって敗戦の衝撃は大きかった。戦時中の教科書を引き続き使用していくことになったが、占領軍の命令で軍国主義的な項目を全部墨で塗りつぶすことになった。本は大切に汚さずと教えられた子どもたちは、少なからず疑問をもった。文章もちぐはぐなものとなり、とても教科書といえるものではなかった。登下校も運動会も入場は男子が先であったが、男女同権、自由主義となり、男女が一緒に並ぶようになった。教室の席も男女別であったものが交互となった。級長も先生が決めていたのが、クラス全員の選挙で決めるようになった。先生の体罰も急に少なくなった。毎日厳しく教えられ、鍛えられ、叩かれたのは何だったのか。個人は自由である、何をしてもいい…子ども心に皆深い戸惑いと不信感を抱いた。

昭和20年(1945)12月1日、中野町の陸軍病院が、終戦によって施設、人員、資材の一切を引き継いで一般総合病院となり、国立豊橋病院として発足した。

昭和20年12月9日、農地改革指令が発令、これに基づいて翌年10月に「自作農創設特別措置法」が制定され、地主小作人制度が廃止された。地主より小作人に土地が譲渡された価格は、反当(300坪)500～800円の安価であった。地主は、自分で耕作していた田畑17反(小作人に耕作させていた田畑)まで(最高2町2反)、それ以上は小作人に譲渡することとなった(山林等は別であった)。

当校区には戦争以外に、もう一つ忘れてはならない先人が成した大きな出来事があった。それは、昭和天皇即位を記念して発足した、磯辺耕地整理組合である。大正15年(1926)12月3日、耕地整理地区実地踏査願県知事申請に始まり、昭和3年(1928)11月20日に耕地整理組合設立申請し、昭和4年5月23日に認可された。当時の校区農地状況は、「先年、陸軍第十五師団の練兵場化した高師原の松林は山骨露出し、昭和池貯水池は、一朝降雨あれば濁流土砂が貯水池に流入、全く貯水能力を失う。内張川は地勢上三方に分かれており、一定の排水路によらず田越しに排水、一朝大雨あれば三百余町歩氾濫せり。耕作道は配置不適當にして屈折多く、幅員も一定せず、水路との交点に橋梁なく、人畜の通行は勿論、肥料、農作物の運搬極めて不便、他人の土地を通る状態なり。」(『御大禮記念磯辺耕地整理組合誌』)であった。つまり、現在ではとても考えられない状態であったことがわかる。



磯辺耕地整理組合の人々 昭和26年

計画の大要は、昭和池貯水池の堤防の嵩揚、内張川水路の改修導水路の新設、地目変換開拓を行い、区画整理をして、年々多発する水害をなくし、交通運搬、灌漑排水、その他耕作上の便益を図るものであった。昭和初期より昭和30年までの約30年間(太平洋戦争時一

時中断)、磯辺校区の発展のため幾度となく申請、変更認可を繰り返し、この難工事、農地改革を成し遂げた大竹藤知組合長を始めとする関係各位の尽力に対し、校区民は敬意と感謝の念を忘れてはならない。

ソ連抑留兵士（昭和24年6月帰還）を除き、国内外に出征していた校区出身の兵士が、昭和20年10月から21年にかけて続々帰還した。老人・女性・子どもばかりの農家に活気が戻った。九死に一生を得て帰還した大正と昭和初期生まれの兵士達の我武者羅な努力によって戦後の町は蘇った。

昭和21年（1946）10月の校区町内のお祭りには、各町の男女青年団が村芝居や舞踊を演じ、競われた。見物巡りが楽しみであった。その後は、食糧増産で稽古の時間が取れなくなり、23年以降は旅回りの演芸や映画に変わっていった。昭和20年12月15日の国家神道分離指令、昭和21年1月1日の天皇人間宣言により、磯辺小学校北側校庭の奉安殿解体、忠魂碑の地下埋設を実施する。昭和22年1月22日ヤミ市の取り締まりが始まる。豊橋市内、神明町辺りにヤミ市が出来た。担ぎ屋が農家に頻繁に現れ、穀物の買占め、自転車や家庭用品等と物々交換していった。

昭和22年4月1日、六三制教育の開始。昭和9年4月生まれより適用、8年生まれは旧制中学1年間、時習館併設中学2年間、時習



磯辺小学校 1年生 昭和24年
戦後まもなくで服装はバラバラ、ぞうり履き

館高校3年間となった。高等科に残った者は、新制中学3年間となったため卒業が1年延長した。昭和23年度の磯辺小学校の児童数は、359人（男191人、女168人）9学級であった。

昭和22年4月1日、新制中学校の発足と共に磯辺小学校の卒業生は、福岡・高師小学校の児童と共に豊橋市立南部第一中学校（現在の南部中学校）へ通学することとなった。開校はしたものの、旧陸軍兵舎を利用した校舎は学校といっても施設設備は何もなくて、開校後、半年間は卒業した小学校の校舎の一部を借りての（豊橋市立南部第一中学校磯辺教場）分散授業であった。その後、本校への通学となっても、しばらくは机がわりの「みかん箱」持参の通学であった。翌23年には、植田・大崎・野依の3小学校を学区とする南部第二中学校と統合し、校名も豊橋市立南部中学校（生徒数1543名）となって現在に続く。

昭和22年東田球場で開催された豊橋市主催の小学校野球大会に磯辺小学校も出場した。昭和24年の豊橋市主催、新制中学野球大会では南部中学は優勝した。昭和24年（1949）末にはセパ両リーグのプロ野球球団も結成され、ラジオ第二放送で実況放送が開始された。また、豊川球場で巨人—中日のオープン戦が開催され、大人も子どもも観戦に出かけたが、杉浦、川上、青田など、プロの上手さとその妙技に皆驚かされた。このころの内張川は水もきれいで、鮒やどじょうがおり川の中に入



内張川で泳ぐ子どもたち 一色町宮前

って泳ぎながら魚取りを楽しんだ。

中学3年生は、京都・奈良1泊修学旅行が実施されるようになったが、まだ食糧事情が不安定で、米持参の旅行であった。

昭和25年（1950）6月25日、朝鮮戦争が勃発して特需景気となり、日本は急激に復興していった。昭和25年7月8日、警察予備隊が創設され、職のなかった若者や旧軍人が入隊していった。昭和26年9月8日、日米安全保障条約が調印された。

昭和27年（1952）5月、夜中に愛大構内^{いけ}に生垣^{がき}を越えて入った警官を学生が掴^{つか}まえたことを機に、12名の学生が逮捕された「愛大事件」が起き、大学の自治と警察権の対立であった。

このころ、磯辺校区の人々は、陸上競技長距離走に強く、豊橋市の校区対抗駅伝大会に出場し、たびたび優勝した。なかには豊橋市の代表チームとして、名岐駅伝など東海地区の大会に出場する選手もいた。



豊橋市校区対抗駅伝大会 優勝 昭和24年

昭和28年（1953）2月1日NHKがテレビ放送を開始、同29年には第1回紅白歌合戦が放送されたが、一般家庭にはまだテレビが普及しておらず、テレビのある家の居間にお邪魔して見せてもらった。白黒テレビであったが、部屋に入りきらぬほどの隣人が集まった（カラーTV放送、昭和35年9月10日）。

昭和28年9月25日、三河地方を襲った13号台風は渥美半島から北東に縦断、風速45メ

ートル、総雨量200ミリ、大潮と満潮などが重なり、二回新田沖島南の梅田川の堤防が決壊した。そのため、二回新田一帯の住宅、田んぼ、養魚池が冠水した。沢山の鰻や鯉、鮒が浮き上がり漂着した。稲は収穫前で全滅、その後2～3年間は稲作は出来なかった（この経験を生かして^{ごくわ}極早稲種栽培^{まじゅ}に変わっていった）。住宅も床上浸水が2ヶ月近く続き、隣町の知人や社務所などに避難し、仮住まい生活をした。堤防の復旧工事が進まず、サンドポンプを待つしかなく再起不能説まで流れた。梅田川の河口の干潟を掘り、埋め立て復旧したが河口に深みができ潮干狩りに来た人が溺れ問題にもなった。

戦前は農業の副業として養蚕が盛んで畑は大半が桑畑であった。戦後は食糧増産供出が農家に要請され、菜種、大麦、小麦、馬鈴薯、甘薯、大根、キャベツ、白菜と変わっていった。田んぼで生産される米が供出の主力ではあったが農家は米を温存、芋やキャベツを代替供出したこともあった。

昭和28年頃になると白菜が高騰し、品評日本一になったことにより農家の収入が増えだした。昭和33年（1958）頃から農耕の機械化が始まり、牛鋤き農耕から動力耕運機へと変わっていった。

昭和29年頃には、三種の神器といわれていた電気冷蔵庫、洗濯機、掃除機が農家にも急



磯辺小学校 6年生 昭和29年
全員学生服を着用

速に普及していった。

昭和31年（1956）7月17日、「もはや戦後ではない」と経済白書で発表、戦後色は薄らいでいった。

（6）昭和から平成へ

昭和30年代は、戦後の第一次ベビーブームを経て、男性中心社会から女性の意識の向上と就労意欲の増加に伴い女性の社会進出が一段と強まった。

昭和33年4月校区民待望の磯辺保育園が開設され、幼児保育が一段と進んだ。

昭和39年（1964）の東京オリンピックを境にして、磯辺小学校の児童数も毎年増加の一途をたどり、昭和59年度の児童数は1239人（男664人・女575人）、30学級とピークに達した。児童数の増加に伴い教室不足が問題となり、学校の移転が何度か検討されたが、現場所への愛着と卒業生の思い出のよりどころとして、増築で対応することに決定した。

この間、昭和46年（1971）にプール、昭和48年に体育館の設備が完備し、児童たちは伸び伸びとした学校生活をおくるようになった。

昭和50年～60年代は、第二次ベビーブームにより磯辺保育園の園児が増加し、一つの保育園では対応が出来なくなり、地域の要望もあって長栄保育園が開設された。

昭和56年（1981）芦原小学校が新設され、松井町が芦原校区へ編入され、昭和60年（1985）に南陽中学校が新設され、同時に中野小学校が新設された。中野校区には区割り替えにより二六町・王ヶ崎団地・中野町の一部・草間町の一部が編制替えとなった。

南陽中学校には、磯辺・中野校区の生徒が通学し、22年の歴史を刻み現在に至っている。

平成10年度からは、磯辺小学校に特殊学級「ひまわり学級」が新設された。

入学式から卒業式間での6年間、学習・運動会・学芸会などは、終戦当時、成績1番2

番等の成績による順番制、代表制であったが、現在は児童の個々の特性・自主性を伸ばし、全員が参画して健全な児童を育て、共に歩み成長することを期待している。

平成18年度から、磯辺小学校では3学期制から2期制（前期・後期）へ移行し、学校教育の充実が期待される。

校区全体を見ると、昔は農村地帯であり、昭和30年代には、農家から牛の姿が消え、機械化が推し進められた。

昭和42年（1967）南部農協が設立されるまで、校区别産地（磯辺白菜）であったのが、産地の区別が無くなり、農家同士のグループによる生産に変化した。

昭和43年（1968）に豊川用水が490億円の費用と19年の歳月をかけて完成した。磯辺校区は、昭和池に田んぼ用として農業用水を導水したが（田んぼへの導水は内張川に沿って水路が敷設された）、上原など畑地には導水配管敷設を拒んだ。既に草間町では、昭和池の水を利用した初のスプリンクラーによる畑地灌水を行っており、主力農作物は冬季生産の白菜で、多量の水は必要なかったからである。もし農業用水を導水していたら、天気にも左右されず播種、品質の良い野菜や付加価値の高い農産物を生産し財を成したかもしれない。また景観も一変していたかもしれない。

昭和38～40年にかけて市営の城山団地ができ、向草間町の一画に昭和40年（1965）城山町が誕生した。さらに、昭和51年磯辺中野町、昭和52年王ヶ崎団地が誕生した。

農村地帯であった当地区の一部が市街化区域となり、昭和52年草間町と向草間町の間にある内張川周辺の田んぼを埋め立て宅地となり、一色団地が誕生、その後、内張町も誕生した。一色町、草間町、向草間町、松井町が市街化区域となりマンション・借家・社宅等が建てられ校区の人口の増加につながった。

昭和27年までは「町内会長」の組織であったのを、昭和28年から町の総代、そして校区の総代会の組織となり、市全域の校区総代が集まり、市の総代会組織が発足した。校区の総代会は、松井・向草間・草間・一色・中野・駒形・大山・二回・王ヶ崎の9町であった。昭和40年城山町、昭和60年一色団地が加入昭和56年松井町が新設芦原校区へ、校区の編制替えで現在は10町の総代で校区の総代会を運営している。

内訳は市総代会での委託、調整、連絡会議等で校区全体に周知方を図っている。

校区では体育祭・慰霊祭・交通安全・防犯・防災・清掃指導等を各総代が担当し、校区全体の連携化を図っている。

体育祭は、昭和50年までは小学校の運動会と合同で開催していた。児童の増加に伴い学校行事に支障を来すため、昭和51年に総代会と校区体育委員会と協力し、町別対抗の第1回体育祭が開催された。以後、年々と歴史を積み重ね、平成18年度は市制100周年、記念すべき第31回を迎えた。

慰霊祭も戦後60年余となって、平成16年度までは総代会が主催で行ってきたが、尊い戦没者のおかげで現在があり、「過去を風化」させないという気持ちを継続するために平成17年度からは遺族会と協力して合同で行うことになった。

近くには大型スーパー、豊橋南郵便局等があり、また、時習館・豊橋工業・豊橋聾学校



校区総代会のようす 平成17年度



校区市民館 趣味のグループ活動 踊りの教室

および愛知大学等の文教地区に隣接している。

国立豊橋病院の跡地には保健所、保健センターなどが移転を予定されている。

公共施設では、豊川用水完成に伴い、昭和池の2/3を埋め立て、昭和51年愛知県豊橋勤労福祉会館（アイプラザ）が完成した。会議・いろいろな催し物等で利用され、地域発展のために大きく寄与している。

昭和55年（1980）磯辺校区市民館が完成し、校区の各種団体の会議や多くの自主グループによる趣味の会や相互の交流を図っている。また、子どもたちのために図書室を開放して憩いの場となっている。

磯辺校区の人口の変化は次のとおりで昭和50年代から急激に増加し、昭和60年に中野校区への区割り変更があった。

磯辺校区世帯数および人口の推移(国政調査)		
年	世帯数	人口
昭和25年	563	3301
昭和50年	2028	7910
昭和55年	3454	11657
昭和60年	2514	8580
平成2年	2911	9403
平成12年	3739	10396

平成18年4月1日の世帯数4164、人口10849（男5562人・女5287人）である。

昭和25年（1950）世帯数563のうち農家は293で52.9%を占めていたが、平成12年（2000）では3739の内154で4.1%に減少した。

磯辺校区は、農業地域から住宅地域に変わったと言える。農家も293から154にほぼ半減した。

2 産業

(1) 農業

江戸時代 現在の草間町やJA豊橋磯辺支店のある台地は、17世紀後半に牟呂町の先祖が開拓して畑とした。しかし、水利が悪いので「草間山のうち、上ノ原」と『牟呂史』には記載されている。

田は稲作が中心で、年貢も米で納めることが多かった。畑は綿も栽培し、明治9年の調べでは綿の生産量は9504貫、木綿の生産量は2180反と記録されている。

明治時代 明治12年(1879)頃の戸数は913、人口4233と記録されており、ほとんどが農家であった。駒形町には飲食店、酒類菓子店等もあった。大山町では梅田川沿いに塩田を作り食塩を作っていた(『草間区地誌略])。

大正時代 畑は桑畑が中心であり、農家の副業としての養蚕が盛んに行われていた。その他には麦、甘藷、馬鈴薯等も栽培していた。水田は全部稲作であり、その裏作として麦や菜種を栽培していた。内張川は今のよう整備されておらず、用排水は自然のままであったために、常に干魃かんぼつに苦しみ、時には水害を被る有様だった。そこで大正15年(1926)12月、県に「耕地整理」を願い出た(『御大禮記念磯辺耕地整理組合誌])。

昭和時代 昭和2年(1927)の記録によれば全農家戸数383の内、春蚕・夏秋蚕とも190戸が養蚕をして収入を得ていた。養鶏、養豚をする農家もいたが数はすくなかった。昭和初期の世界的経済恐慌により、アメリカ向けの生糸は滞貨し養蚕は不振に陥った。

昭和4年、磯辺耕地整理組合を設立し、初代の組合長に大竹藤知氏(後の豊橋市長)がなり事業が始まった。

まず初めに農業用水確保の池として、草間町の雨溜池であった杓子池(上池、中池、

新池の3つの総称)を面積5町1反5畝の大貯水池に改造した。これを「昭和池」と改称し、下流域の農作物栽培に大いに役立てた。しかし、昭和43年(1968)豊川用水が通水し、昭和池の必要性が薄れたため、その大部分を埋め立てて愛知県豊橋勤労福祉会館や市営草間住宅が建設された。

内張川も改修し、水田や農道が整理された。全てが完了したのは昭和26年(1951)7月で、これを記念する石碑は昭和池の南西の堤防に建てられている。

[畑作の中心 白菜栽培]

大正末期頃から一色町の数名が白菜栽培に取組み、次第に桑畑が白菜畑に転換され、作付面積が伸びていった。

昭和12年(1937)7月、日中戦争が始まると戦地に乾燥白菜を届けるようになり、いっそう白菜栽培に力が入った。

昭和16年には、当時の磯辺産業組合では「白菜百萬貫生産突破祝賀会」が開催された。しかし、第二次世界大戦のために食糧不足となり、畑作は食糧作物の「甘藷、麦」に転換され、白菜栽培は一時中断せざるを得なかった。

戦後の昭和21年(1946)10月に「自作農創設特別措置法」(第二次農地改革)が、占領政策の一環として成立した。それにより全国に農業協同組合が設立された。当時の磯辺校区内の専業農家は298戸であった。

昭和22年頃より、再び白菜栽培が始められており、昭和23年、豊橋市販売農業協同組合



白菜畑(右方は磯辺農協の倉庫)

連合会の「そ菜取扱高」で磯辺農協はトップの成績であった。昭和30年代の校区白菜栽培面積は、100haを越すほどになった。

全国の二大産地（茨城県八千代村・群馬県館林市）は東京市場が中心で、しかも年内から年明けまでの出荷であった。そこで磯辺は高値で販売するために、1～3月まで安定供給をする工夫をした。その一つが「藁」で白菜の首を縛ることだった。白菜は霜が降りると外葉が開いて、結球部分が痛んでしまい商品価値が下がってしまう。関東地方ではそれを防ぐために、根を切った株を3～5株を寄せ集めて、藁を被せて保存をしていた。立ち氷や雪が降るので出来たが、雨の降る当地では不可能であった。そこで、磯辺では霜の降る前に、藁で白菜の首を縛って結球部分を外葉で保護することによって品質を保持した。これにより長期間にわたって新鮮な白菜を市場に出荷することが出来た。

次に、より新鮮で品質の良い白菜を少しでも早く市場に届けるために、生産者は夜なべ仕事をして牛車等に積み込んだ。そして早朝暗いうちに家を出て渥美線の高師駅まで運搬した。遠い人は牛の尻を1時間以上も叩く大変な仕事であった。冬の寒い朝6時頃には、品質の検査を受けて伝票に記入してもらい、駅のホームまで乗り入れて輸送貨車に直接積み込んだ。午前9時頃までに終わり、豊橋駅経由で関東や関西に輸送することにより、次



白菜積み替えのようす 高師駅

の日の市場に間に合わせた。現在では渥美線に貨物輸送はないが、磯辺白菜を一大産地としたのは輸送貨物駅としての高師駅の存在が大きかった。

{ブランド品になった磯辺白菜}

出荷先は京阪神地方に70%弱、関東地方が30%強であったが、常に価格は最高値がついた。いわゆるブランド品であった。市場で高い評価を得るために、生産者と農協がそれだけの努力をしたからであった。

☆ 品質検査

一定の基準を作り等級分けした。検査に合格しない白菜が入っている荷は絶対に出荷しなかった。毎朝、高師駅に検査員を配置し、抜き取り検査をした。例えば、白菜の外側が少しは青色でも、切った中身は白色であること。しかも、結球白菜でなくてはならない。柔らかくフワフワした不完全結球は不合格とした。現在では中身が黄色い方が甘みがあると喜ばれているが、当時はそのような品種はなかった。また、虫に食われたものが一つでも入っているのは不合格とした。つまり消毒の時期にも十分配慮しなくてはならなかった。このように一定の品質で、安心して消費者に買ってもらえる白菜のみを出荷した。そのためには農協と生産者で時々研修会を開催し、より品質の良いものを生産し、出荷する努力を怠らなかった。

☆ 安定供給

常に市場が求めている量を安定して供給することは、信頼を高めるとともに、高値で取り引きをしてもらうためには欠かせない条件である。そこで出荷量を生産者に割り振る、いわゆる「出荷調整」をした。

また、白菜の端境期の3月中旬以降には「簡易貯蔵白菜」を出荷して安定供給に努めた。簡易貯蔵白菜とは、気温が上がり花芽が出来る前に、根を切って家の中や、林の中に囲っ

て保存したものをいい、これを出荷した。

後には、1～2月頃の最盛期の白菜を木箱に詰め、京阪神地方や関東地方の市場の近くにある冷蔵庫会社と契約して、冷蔵庫に保存した。いわゆる「冷蔵白菜」を出荷した。これには当然保管料が出るため、コスト高となり投機的なものであった。



白菜出荷梱包方法の変化（左から右へ）

点は外から品質が確認できることだった。

昭和37年（1962）のメートル法の完全実施にともない、1袋の量目は20kgとなった。

昭和40年代には野菜の消費構造の変化、核家族化等により切り売りされたり大玉が敬遠されるようになった。更に、昭和40年代後半にはトラック輸送が中心になったことにより、積込み等運搬が扱いにくいことや、20kgと15kgのケース単価の価格差があまりないことから、小玉化の栽培とともに昭和50年度より量目を15kgとし、ダンボール箱で送った。

【その他の畑作】

白菜の栽培は9月から3月頃までだから、春から夏にはきゅうり、かぼちゃ、西瓜、トマト、ニンジン等の果菜類を栽培していた。

昭和40年代に入り、農地に住宅が建ち始め農業を取り巻く環境が著しく変貌した。

【水田の作物】

水田は全て水稻栽培で、二毛作としては麦や菜種が栽培されていた。

米の生産は、昭和40年度までは需要に追いつけなかったが、昭和42年度以降は土地改良の進展、品種の改良、栽培技術の向上等により需要を上回った。

そこで政府は、昭和44年度に稲作の転換対策事業、昭和45年度に生産調整対策事業と農産物輸入自由化品目の拡大等により乗り出した。これにより農家は水稻栽培を変更せざるを得なくなった。昭和46年度には個人休耕田10aに付き奨励金3万円を出すことになった。磯辺校区でも休耕田にしたり、土を入れて畑や宅地にする人も出てきた。

こんな努力もした

昭和34年（1959）9月26日の伊勢湾台風で、発芽して間もない白菜が壊滅状態の被害を受けた。当時、農協職員酒井信吉氏（向草間町）は、直ちに自ら自動車を運転し、白菜の種を仕入れていた豊橋のチカダ種苗の息子と二人で、午後3時豊橋を出発した。寸断されていた国道1号線を避け、中山道をひた走り夜遅く京都の「タキイ種苗」に着いた。9月末に蒔いても結球する「タキイ種苗 交配2号」の種を仕入れた。車中で仮眠し夜中12時に京都を出発した。早朝豊橋に帰着し、早速生産者に配分した。この年、他の生産地は手が打てず不作であったが、「タキイ種苗 交配2号」は見事に結球し、お陰で磯辺白菜は高値で販売することが出来た。

なお昭和20年代の品種は「野崎白菜」であったが、4～5年連作すると出来が良くなかった。その後は「理想白菜」が主体となった。「交配2号」はこの年のみの生産であった。

（酒井信吉氏談）

【白菜出荷用包装と量目の変化】

白菜を出荷する時、数量の確認と品質保持等のために包装した。

昭和20年代は、萱で編んだ筒状のものに6貫目（22.5kg）の白菜を入れ、縄で入口を閉じて出荷した。直方体に包装できるため貨車への積込みには便利であった。

この萱は主として青森県から買いつけた。毎年1貨車8000枚位を、30車兩位仕入れていた。しかし、徐々に仕入れが難しくなりだしたと安価なポリ袋が普及しだしたことにより、これに取って代わられた。ポリ袋の利

(2) 交通のようす

[大崎街道]

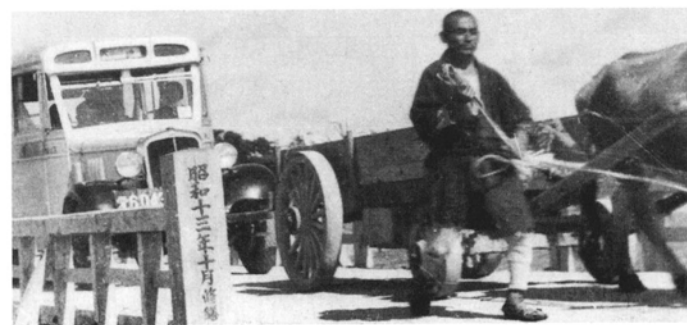
明治24年(1891)作成の地図と明治42年(1909)6月作成の「第十五師団司令部」の地図を比較すると、昔の街道は現在の街道より北側を通り、旧国立豊橋病院跡地の南側に沿って南下し、駒形町の本宮神社北から坂道を下っている。



明治24年(1891)作成の地図

現街道の位置に、しかも直線的に大山町方面に移設されたのは、明治41年(1908)に第十五師団が福岡町周辺に移駐したときである。師団の施設とともに旧国立豊橋病院の前身である衛戍病院と衛戍監獄(草間町字郷西の一角)も建設された。この時、幅員8間(14.5m)の立派な道が敷設されたが、大崎橋はまだ架橋されておらず、大正4年(1915)にようやく架設された。

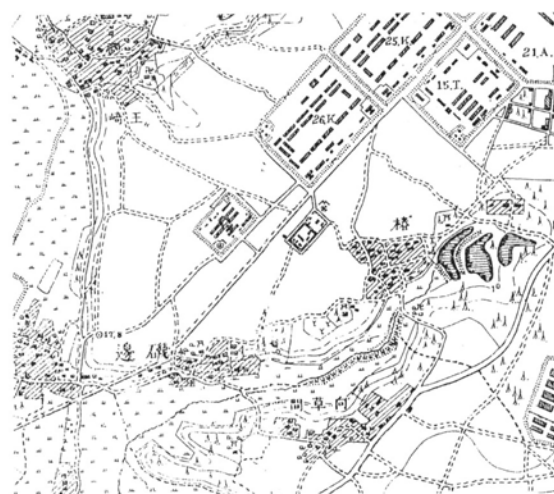
愛知大学前から福岡小学校、豊橋南郵便局を経て病院の正門まで、道の両側に桜の木が植えられており、春には満開の花が咲き誇っていた。



大崎橋を渡る牛車とバス

昭和30年代に入り自動車が多くなるにつれ、枯れたり切り倒されてしまった。

大崎街道にバスが開通したのは、昭和6年(1931)にタチバナ自動車(株)が豊橋～大崎間に走らせたのが最初だった。



明治42年(1909)作成の地図

乗車定員は20名前後であったが、夏季には大崎海水浴場に行く臨時バスも出るようになった。当初はガソリンで走っていたが、昭和12年(1937)に日中戦争が始まると「ガソリン消費節約規制」により、昭和13年8月より「木炭バス」を登場させた。左下の写真は昭和14年撮影とされていることから「木炭バス」と考えられる。車体の後ろに炉を積み、木炭を燃やして燃料としていた。

そして更に昭和15年5月からは、タチバナ自動車が愛知県下のトップを切って「薪バス」の運転を開始した。この「薪バス」は普及しつつある「木炭バス」とは違い、丸太の切れ端を直接ガス発生炉に充填して燃料とした。1km当りの経費は、ガソリンと比較して安かった。徳用といわれる木炭バスの半分ですみ経済的であった。しかし、馬力が小さく磯辺小学校裏の坂道を登るとき、お客が多いと登りきれず、時にはお客が降りて後ろからバスを押し上げたと聞く。

戦後昭和20年代前半まで「薪バス」はのろのろと走っていた。

昭和21年(1946)に衛戍病院が国立豊橋病院になったり、昭和32年(1957)大崎島に東都製鋼(現トピー工業)が稼働を開始することにより、大崎線のバス本数が増加され、1時間に数本が往復したり、駒形町折り返し運転も行われた。しかし、平成17年2月で国立豊橋病院が閉院されることにより、運転本数が著しく減ってしまった。

[田原街道]

国道259号線(鳥羽豊橋線)は古くは奥郡^{おくごうり}街道と呼ばれ、東海道吉田の宿と渥美半島諸村を結ぶ重要な生活道路であった。

梅田川に架かる「植田橋」は明治13年(1880)8月に架橋された。

明治41年(1908)第十五師団が駐屯するまでは幅員の狭い道であったが、軍用のために整備され幅員も拡張された。しかし、現高師緑地公園から梅田川方面はそのままであったが、国は大正9年度から30ヵ年にわたる第1次道路改良計画を策定した。それにともなって現在のように幅員を広くし、植田橋まで直線的に移設した。

<バス運行>

大正4年(1915)9月30日、豊橋自動車(株)が豊橋～田原間に初めて「乗合自動車」の営業を開始した。1日2往復で、停留所の1つに「高師空池^{たかしからいけ}」があった。

これに対して大正5年(1916)、ゴム輪馬車会社と田原馬車会社により、豊橋～田原間に「ゴム輪馬車」が営業を開始した。乗車賃は豊橋～田原間が20銭であった。

一方、豊橋自動車の権利一切を譲り受けた福井自動車は、大正6年に豊橋～田原間を60銭で運転を開始した。ただし、雨天、どろ道の時は2割増の料金とした。昭和29年(1954)に豊橋鉄道(株)となり、現在に至っている。

<電車運行>

大正13年(1924)1月渥美電鉄(株)は、高師～豊島間の営業を開始した。運賃は36銭だった。停車場は高師、芦原、植田、大清水、老津、杉山、谷熊、豊島だった。

大正15年4月、新豊橋～黒川原間が全線開通した。この時の停車場は、新豊橋、花田、柳生橋、小池、師団口、兵器廠前、空池、高師と続き、田原の先に加治、黒川原があった。昭和6年に師団口～高師間が田原街道の真ん中に敷設されていたものを、現在の位置に並行移設した。

[南陽通り]

県道388号線(大山豊橋停車場線)は八間道路とか海軍道路と呼ばれていた。

第2次世界大戦の始まった翌年の昭和17年(1942)、大崎島に海軍飛行場ができ、昭和18年4月、豊橋海軍航空隊が開隊した。豊川市にあった豊川海軍工廠からの武器、弾薬を輸送するために整備された道路であり、また、幅員が8間(14.5m)あったことから上記の呼称がつけられた。

昭和28年(1953)9月25日の13号台風によって堤防が決壊し、海水が現南陽中学校のある欠下まで押し寄せた。養魚場は大きな被害を受け、死んだ魚がたくさん浮いた。八間道路はしばらく利用できなかった。

[豊橋バイパス]

一般国道23号線豊橋バイパスは、名豊道路の一部として計画された。

第二東海道の一環としての構想に基づく重要な路線で、将来的には豊橋東バイパス、蒲郡バイパス、岡崎バイパス、知立バイパスと一体となって、一般国道1号線や23号線の交通混雑緩和を図るのに役立つことになる。

現在は、前芝町から野依町までを利用することができる。平成18年度中には、野依町から東七根町までの2.3kmが開通予定である。

(3) 校区の活動

磯辺校区には、10町の町内会組織があり、それぞれの町内から選ばれた町総代10名による校区総代会が中心となり、社会教育委員会、体育委員会、子ども会、更生保護女性会、遺族会、老人クラブ連合会、消防団、民生・児童委員、小学校PTAなどの各委員会とともに校区の各種活動を進めている。

これらの各委員会の委員も、各町内会から選ばれた人々により構成されている。ただし、老人クラブ連合会は10町の内5町のみ老人会があるだけであり、これからますます高齢化社会が進むと予測されているなか、大きな課題といえる。

なお、上記委員会とは別に、これらの委員が兼任している校区防犯協会、交通安全委員会、青少年健全育成会、校区市民館運営委員会がある。各委員会は、それぞれ次の事項などに基づいて年間計画を立てて活動している。

- 1 明日の豊かなまちづくり
- 2 安全で明るい市民生活を築くまちづくり
- 3 青少年が健康で明るく育つまちづくり
- 4 地震等災害から市民を守るまちづくり

各種の活動の中から校区全体としての行事を記述する。

磯辺校区体育祭と体育委員会関係

磯辺校区で最も盛大に行われるイベントは、毎年9月の第4日曜日に磯辺小学校の運動場を借りて開催する「磯辺校区体育祭」である。平成18年に31回目の大会が行われた。

この「体育祭」は、校区の多くの人々が参加できるように、保育園児から老人会までを対象とする競技種目があり、単に選手による競技だけでなく、各町内の役員が応援席を準備して各町の選手も加わり、応援席は一層賑やかになる。例年、選手ならびに校区役員、町内役員の参加者が約1000人、応援の人々を合わせると2000人程度の人々が集まり絶好

の交流の場となる。

南陽中学校陸上部の生徒達が体育委員に協力して各競技の準備を行い、和太鼓部の生徒が昼休み時間に演奏して地域のイベントを盛り上げている。

「体育祭」は、総代会と体育委員会が中心となって進めている。「体育祭」以外にも体育委員会が開催する球技大会が年間3回あり青壮年の交流の場となっている。

体育委員会関係者は、南部地域の4つの小学校校区合同、第7ブロックスポーツクラブ「ファインズ」(福岡、磯辺、中野、栄のアルファベットの頭文字)でも中心的に活動している。

趣味の作品展

社会教育委員会が「校区体育祭」当日に校区市民館で開催する。

展示される作品は、校区の人々の絵画、写真、手芸、工芸などのほか、小学生や保育園児の作品も展示され、「体育祭」への参加者の多くが訪れている。

磯辺校区成人式

社会教育委員会が成人の日に主催する「磯辺校区成人式」は、磯辺小卒業で20歳を迎えた人々をお祝いすることを主体に進めており、卒業時の小学校の先生も来賓に迎えている。

校区総代会長をはじめとする町総代のほか、校区の委員会委員多数が出席し祝っている。

磯辺フェスタ

PTA委員会が、例年小学校が夏休みに入ったばかりの7月最終土曜日の夕方開催している。PTA委員のおかあさんやおやじの会の人々によるいろいろなゲーム、やきそばの屋台などが好評であり、老人会連合会も協力し多くの参加者がある。平成18年には市制100周年を記念して「みんなで創ろう大きな輪 in いそべ」として、校区の各委員会も協力し、校区全体の交流の場となった。

(4) 公共施設

国立豊橋病院

国立豊橋病院は、昭和20年（1945）12月1日から一般の総合病院として発足した。

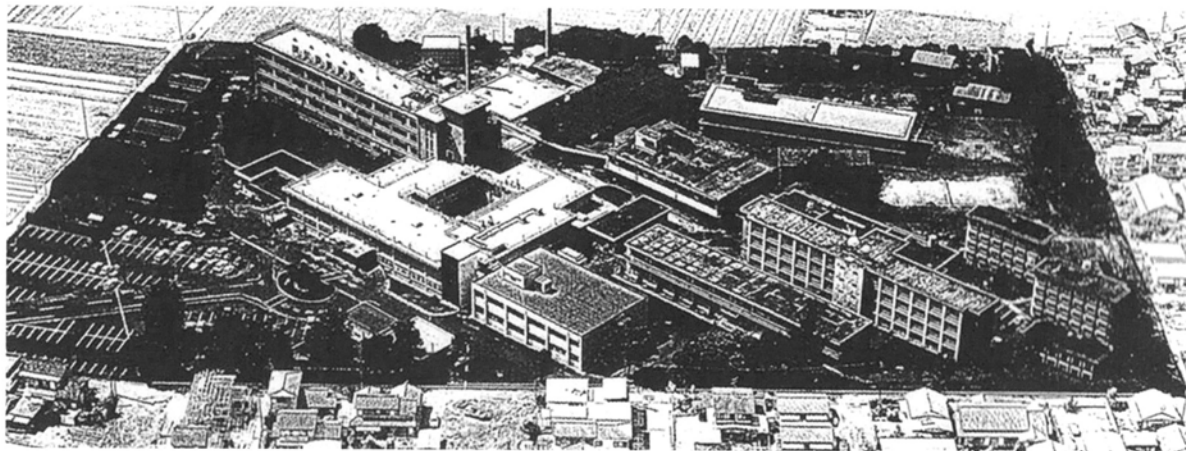
中野町に病院が置かれたのは、明治18年（1885）4月に歩兵第十八聯隊が名古屋より豊橋に移駐した後、明治41年（1908）に第十五師団が設置され高師原に歩兵、騎兵、野砲等の兵営が置かれ、師団の衛戍病院が設置されたときであり、のちに陸軍病院と改称された。

昭和20年8月15日の敗戦によって、旧陸軍病院の施設・人員・資材等の一切を引継ぎ国立豊橋病院となってから60年間、地元の人々にとって重要な施設であったが、平成17年4月1日より独立行政法人国立病院機構豊橋医療センター（飯村町）に統合された。



昭和25年頃の玄関
丹頂鶴が居り癒された
（国立豊橋病院20年史）

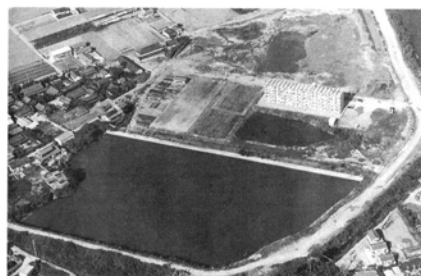
旧国立豊橋病院は平成17年度中に解体された。跡地は、国により整地された後に豊橋市に移管され、市民の健康づくりの拠点として保健所、保健センター（休日夜間急病診療所併設）と障害児やその家族を支援する地域療育センターが平成22年までに整備される予定。



国立豊橋病院全景写真（国立豊橋病院50年より）

愛知県豊橋勤労福祉会館

愛知県豊橋勤労福祉会館は、昭和51年（1976）7月21日草間町の昭和池埋立地に開設した。農業用溜池であった昭和池へ昭和43年（1968）に完成した豊川用水を導水することになり、昭和46年昭和池を1/3に縮小することが決定した。埋め立てられた2/3に公共施設等を建設することになり、愛知県が勤労者を始めとする一般県民の人々の教養、文化および体育の向上ならびに余暇活動の場として利用する総合福祉施設として建設した。



昭和池埋め立てによる勤労会館予定地のようす
（愛知県豊橋勤労福祉会館 提供）

しかし、豊橋市が「地震防災強化地域」に指定され、当会館も耐震補強が必要なことおよび勤労者の利用が減少してきたことから、愛知県が廃止の予定を打ち出しているが、学校関係の行事などや演芸、芸能関係にも利用されており、多くの市民から存続の希望が出ており、今後の愛知県ならびに豊橋市の取り組みが注目される。

第3章 教育と文化

1 学校教育・保育

(1) 寺子屋のようす

磯辺に学校ができる以前には、磯辺の子どもたちは、どんな教育をうけていただろうか。子どもたちは毎日の生活の中で両親や祖父母たちから、くらしに必要なことを、その場で教えてもらっていた。また、子どもたちは家の人が見習って成長していった。今でいう家庭教育であった。それでも当時は不自由するのでもなく少しずつ生活の智慧を積み上げながら成長していった。

しかし、世の中が進むにしたがって、文字も知らず、学問もなくしては生活に不自由を感じるようになり、村内の物知りの人や和尚さんについて、字を習ったり、そろばんを教してもらおうようになった。こうした勉強をする所を寺子屋とか塾といい、勉強をしてくれる先生を「お師匠さま」、勉強に通う子どもを「寺子」とか「筆子」といった。磯辺校区内にあった寺子屋や塾について調べると、

町名	師匠名	職業	筆子数	教科
草間	内藤忠右衛門	農業	10人	習読算
草間	三浦源三郎	農業	25人	習算
一色	中島市五郎	庄屋	7人	習算
一色	坂牧八三郎	庄屋	9人	算
王ヶ崎	兵藤栄助	庄屋	15人	習読
向草間	白川玄流	僧侶	20人	習読算
駒形	兵藤太作	庄屋	28人	習算
大山	山本源五郎	庄屋	15人	習読算

の8ヶ所の寺子屋、8人のお師匠さんがいて勉強をしたい子に指南した。こうした寺子屋がいつごろ開設されたか、はっきりとは分からないが記録に残っているのは、草間の三浦

源三郎師匠が天保元年（1830）、向草間の東光寺の寺子屋が元治元年（1864）からの開設となっている。そして、明治5年（1872）～明治6年まで続いていた。また、教える教科が算数（算術、そろばん）だけを教えていた一色の坂牧八三郎塾は市内の寺子屋にその例をみない特異な存在である。寺子屋では「よみ、かき、そろばん」の全部またはその一部を習うことで十分だったのだろう。

寺子屋へ入学することを寺入りといい、これは何才からという決まりはなかったので、いつでも勉強したい時に寺入りできた。磯辺の寺子屋の場合、数え年の5～6才から始めて2～3年、長い子でも5～6年間通ったようだ。寺入りが許された筆子は、毎日朝五ツから夕七ツ（午前8時から午後4時）までお師匠さんについて「手習い」をするわけである。

手習いは、お師匠さんが書いてくれたお手本で字を覚えたり習字の練習をすることが中心で、だんだん進んでくると、いろいろな本を買って教えてくれるようになっていった。

寺子屋での本（今でいう教科書）は「いろは歌」「^{ながしら}名頭」「^{まちづくし}町尽」「^{おうらいもの}往来物」などが多い。

寺子屋へ通う子のほとんどは男の子ばかりで女の子は少ない。磯辺校区の8か所の寺子屋について調べてみても、はっきり分からない2か所を除いて、男子105人に対して女子は2人という割合である。これは「女の子には学問はいらない、裁縫ができればよい」という風潮があったようである。

磯辺校区には、師匠に学んだ恩を忘れない

で、お師匠様の死後、筆子たちがお金を出しあって建てた「筆子塚」というお墓が4基残っている。(筆子塚の項参照)

(2) 磯辺小学校のあゆみ

明治政府は先進諸外国に追いつくためには何より教育の振興を図らなければならないと考え、明治5年(1872)「学制」を發布した。これは、日本の教育の根本方針を定めたもので、「…必ず^{むら}邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す。」と説いて学校教育の重要性を強調した。これに呼応して磯辺学区も学校世話方(この地方では幹事試補といった)として、大山の山本源五郎^{やまもとげんごろう}氏を選び、それまでの寺子屋の師匠をしていた方々を中心に小学校づくりが開始された。当時としては大事業で、校舎はなし、教科書はなし、先生はなし、あるものは学校で学ぼうとする子どもたちだけという状況からの出発であったので、山本氏たち学校世話方の苦労はなみ大抵のことではなかっただろう。

こうした方々の尽力で、明治6年(1873)6月30日、母校「草間学校」(正式には第二学区第十中学区第十三番小学草間学校)が誕生した。草間学校は今の一色町の長栄寺の本堂を借用して始まった。



長栄寺 「草間学校」開設の碑

大山の山本武八^{やまもと ぶはち}氏が明治12年(1879)に書いた『草間区地誌略』によると、「明治六年十月十二日、小学校ヲ建設シ、長栄寺本堂ヲ

教場トス、是ヲ草間学校ト号」とある。開校の月日が異なるのは、前記は愛知県が開校を許可した日で地誌略に書かれたのは、開校式をした月日と思われる。いずれにしても、学制が發布されてから1年後に小学校を開校したことは驚異的なことで、磯辺地域の周辺でも高師小学校(当時は修徳館といい、明治6年7月開校)について2番目の開校という早さであった。このことは、磯辺の人々が子弟の教育への熱意が高かったことを示している。開校時の児童数は121名(男子96名、女子25名)と記録されている。

ここへは草間(現在の一色、駒形、大山、王ヶ崎も含まれる。)、松井、向草間、芦原の子たちが通っていた。その後、駒形のお宮のふもとに移った。『草間区地誌略』に「本校通学不弁ニ因リ、後六年ヲ経テ、明治十一年本区学校ヲ丸山(此地、土人駒形ト云)ニ建設シ、同十二年一月八日移校ス」とあり、通学に不便だから、駒形に校舎を建てて移ったというのである。明治14年に書かれた『磯辺村々誌』には「公立草間学校 村ノ南方ニアリ、字天獺、長栄寺ヲ仮校トス、後明治十一年、村中協議費ヲ以テ新築ス 教員二名 生徒六十一名 内男五十九名女二名」とある。開校時にくらべて児童の数が半減しており、しかも、女子はたったの2名であることに注目したい。

次に草間学校から磯辺学校となったのはいつごろかということであるが、はっきりした記録はないので断定はできないが、明治15年(1882)4月に校舎増築の許可がおりた記録がある。増築の申請をしたのが、明治14年(1883)7月で、願い出の理由として「明治十二年八月中新築仕候処、生徒増加ニ付、教場手狭ニ相成、殊外混雑仕候間、村内一同協議之上」となっている。長栄寺の仮校舎から駒形の地に移校したのが明治12年1月だが、この時校舎は新築中であったので、一時的に

駒形本宮社の社務所を借りて授業していたものと思う。そして、8月に校舎の完成を待って現在地へ移転してきたものとする。そして、この校舎への移転と同時に校名も「草間学校」から「磯辺学校」へ変更されたものとする。

明治11年(1878)12月28日に、それまでの草間村、向草間村、松井新田等の村々が統合されて磯辺村が誕生しているし、それ以降の残されている記録は「磯辺学校」となっている。

前記の明治14年に書かれた『磯辺村々誌』にある草間学校は、明治9年(1876)1月調べとあるので、磯辺村は誕生していないことから草間学校となっているのである。明治12年(1879)9月に学制が廃止され、それまでの学区制が解かれ、新たに教育令が公布されると、磯辺学校も正式には「渥美郡第八番小学磯辺学校」となった(明治13年5月)。以後、制度上変更は何度かあるが「磯辺」という呼称の変更はなく現在に至っている。明治6年に草間学校が誕生し、明治12年に磯辺学校となって以来、国の教育制度の変更はあったものの、我が「磯辺」という呼称は127年間続いている。

以下、校名の変遷で磯辺の学校を辿ってみる。

- ・第二大学区第十中学区十三番小学草間学校
明治6.9.30～9.3.
- ・第二大学区第十中学区三十三番小学草間学校
明治9.4.～12.7.
- ・第二大学区第十中学区三十三番小学磯辺学校
明治12.8.～13.4.
- ・渥美郡第八番小学磯辺学校
明治13.5.～17.4.
- ・渥美郡第九学区小学磯辺学校
明治17.5.～
- ・渥美郡第四区小学福岡学校磯辺教場
明治20.4.～22.2.
- ・渥美郡磯辺村立磯辺尋常小学校

明治22.3.～25.6.

- ・渥美郡磯辺村立磯辺尋常高等小学校

明治25.7.～39.6.

- ・渥美郡高師村立磯辺尋常高等小学校
(渥美郡磯辺尋常高等小学校)

明治39.7.～大正15.3.

- ・渥美郡磯辺尋常高等小学校・磯辺青年訓練所
大正15.4.～昭和7.8.・大正15.4.～昭和10.9.

- ・豊橋市磯辺尋常高等小学校

昭和7.9.～16.3.

- ・豊橋市立磯辺青年学校(併置)

昭和10.10.～22.3.

- ・豊橋市磯辺国民学校

昭和16.4.～22.3.

- ・豊橋市立磯辺小学校

昭和22.4.～現在

- ・豊橋市立南部第一中学校磯辺教場(併置)

昭和22.4.～22.9.

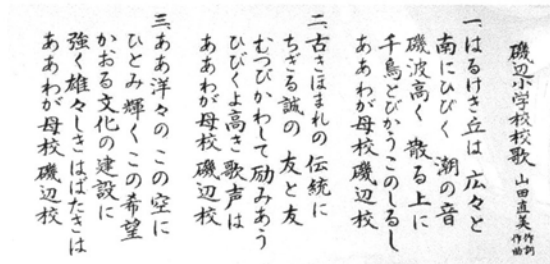


磯辺小学校 昭和40年

次に、「校歌」「校章」「むくろじ」について記述する。

磯辺小学校の校歌は、現在歌われているのと、それ以前に歌われていたものの二つある。現在の校歌は、昭和33年9月、このとき磯辺小学校の教頭だった山田直美先生の作詞・作曲で制定されたものである。また、以前のは明治40年初頭、当時磯辺学校に勤めていた池田京平先生の作詞された歌詞を当時流行っていた「四條畷」の曲に合わせて歌ったといわれている。どちらの校歌も磯辺という校区

の地域性や磯辺の子たちへの期待感、願いが込められて表現されている。特に旧校歌は、当時磯辺周辺の学校には校歌はない時分に磯辺だけ校歌を歌っていたのだから大したものである。



磯辺小学校の現在の校歌

校章については、いつごろ制定されたか記録がないので、はつきりしないが旧校歌の歌詞にある「そもそも千鳥の小学は…、千鳥の小学生徒なる…、げんき甚だ波高し…、此の波荒き大洋に…」から「波に千鳥」の校章がデザイン化されたのではなかろうか。いずれにしても磯辺という土地柄をうまく表現している。

校章



波に千鳥をあらわす

磯辺小学校の校章

現在、磯辺小学校のシンボルともなっている「むくろじ」の木について記しておく。明治6年(1873)、磯辺小学校の前身、草間学校が長栄寺本堂を仮教場として開校した。その後、明治12年に磯辺村の中心地であった駒形の丸山へ校舎を新築して移った。

この時、学校世話方であった山本源五郎氏

が役場吏員であった山本武八氏と図り新生磯辺学校の記念樹として「むくろじ」の小木を近くの山から採ってきて植えてくれたといわれている。



磯辺小学校校庭の「むくろじ」の木
「とよはしの巨木・名木100選」に選定

なぜ「むくろじ」の木かというと、「ムクロジ」は漢字では「無患子」と書き、昔から「病気をしない元気な子」「丈夫な子」の意味で例えられている木であるから山本氏たちも「磯辺学校の子たちに、丈夫で元気に育ってほしい」との願いからムクロジを植えてくれたものと思われる。以来、127年間今も「むくろじ」は磯辺小学校で学び巣立っていった子たちを見守り続けてくれている。



磯辺小学校 平成10年

今年、平成18年8月1日は豊橋市制100年になる。我が磯辺小学校は誕生から133年目となる。今の児童数は645名で21学級である。

(3) 磯辺小学校の活動

磯辺小学校では、「力いっぱい」という校訓のもと、下記の教育目標に基づいて諸活動を行っている。

○進んで学ぶ子

豊かな感性と表現力を持ち、自ら問題を見つけ、解決できる子

○仲良く助け合う子

相手の気持ちが分かり、思いやりのある子

○たくましく元気な子

心身をきたえ、忍耐と努力によって最後までやりぬく子

また、児童会では下記のキャッチフレーズを合い言葉に学校行事や委員会活動、木曜集会などの諸活動が展開されている。

・いつも にこにこ

・そろって 元気 磯辺の子

・ベストをつくす

○木曜集会



木曜集会のようす

児童会が主催する木曜集会では、全校児童がふれあう集団ゲームやクイズ等を通して、連帯、協力、思いや

り等の社会性が育つように運営されている。

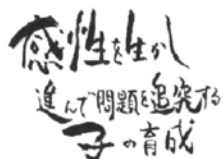
○朝の学習

漢字や計算等の基礎基本の定着を図る学習活動や自由読書の時間となっている。

○学習指導

平成10・11年度の豊橋市教育委員会の委嘱を受けた「学習指導」の研究では、教材の開発、問題意識を掘り起こす授業、人との関わりで自分の考えを深める授業をめざした。

平成16度からは、聞く話すを中心にした確



―「出陣」と「かみどり」を 大別にした授業を通して―

かな学力をつける授業の確立に取り組んでいる。
○総合的な学習の時間
3年「校区探検」
4年「環境学習：内張川の研究」
5年「福祉学習：ハートフル磯辺隊の活動」
6年「防災学習：セーフティ磯辺隊」と積み上げ、問題解決能力を育てている。



車いす体験

○学校行事(運動会)

全校が赤青白の三色のチームに分かれて競う運動会、三色対抗リレー、大玉送りと盛り



源平合戦

上がり、最後の騎馬戦「源平合戦」では子どもたちの勇ましい姿が躍動する。

○PTA活動 (磯辺フェスタ)

「磯辺フェスタ」は運動場を全部使った大行事、焼きそば屋、輪投げなどの出店で夏の夕方に地域の親子連れで賑わう。



磯辺フェスタ

○ボランティア活動

「読み聞かせ」「なんでもポケット」「おやじの会」「図書館ボランティア」「防犯ボランティア」など子どものためにさまざまなボランティアの方々の活躍によって磯辺小学校の教育活動が支えられている。

(4) 南陽中学校のあゆみ

中学校の新設 昭和22年(1947)戦後の学制改革による新制中学校の誕生と同時に、磯辺校区の生徒は、現南部中学校に通学した。

その後、南部地区の住宅地化にともない南部中学校は県下有数の過大校となり、昭和49年(1974)には高師台中学校が分離したが、それでも生徒の増加傾向に歯止めがかからなかった。昭和59年には、49学級、2100名となり翌60年には50学級2220名が予想された。このような情勢のもとに新設中学校の建設の必要性が高まり、中野小学校、磯辺小学校を校区とする中学校の新設が決定された。

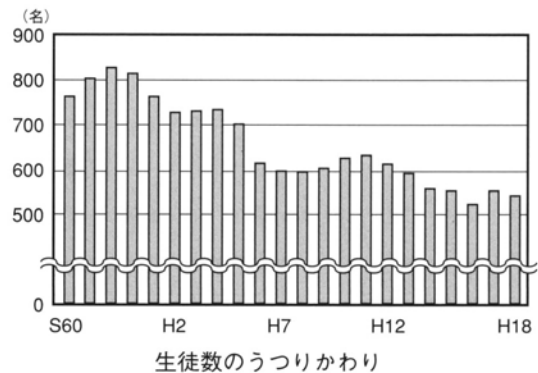
南陽中学校開校 昭和59年(1984)になると豊橋市駒形町字南欠下地内での校舎建設とともに、開校に向けて校区を挙げての取り組みが始まった。5月には、開校準備委員会が中島正磯辺校区総代会長を委員長に、各町総代をはじめ各種団体長を中心に結成され、校名や校章・通学路の決定などの開校準備に取り組んだ。9月には、応募数1278点の中から校名を「南陽中学校」と決定した。



開校当時の学校

昭和60年(1985)4月3日開校式が挙行された。開校式では、高橋アキラ豊橋市長から校旗が飯島健司初代校長に手渡され、市内で19番目の中学校として南陽中学校が誕生した。翌4日には入学式と1学期始業式が行われた。この日、南陽中生徒となったのは、776名、1年生283名、2年生248名、3年生245名で

あった。1年生の出身小学校は、磯辺小学校199名、福岡小学校74名、栄小学校4名、その他6名であった。その後の生徒数のうつりかわりは下表のとおりである。平成18年3月までの卒業生は、4784名を数える。



校区とともに 開校とともに学校支援の輪も広がった。昭和60年5月9日に第1回PTA総会が開催され、初代会長に成瀬英雄氏なるせひでおが選出された。PTAは開校記念庭園や校歌制定などの学校支援活動と同時に、広報活動に力を入れ、平成10年には、広報紙「南陽PTA」が、全国PTA新聞コンクールで最優秀賞を受賞した。昭和60年7月には、鈴木十一中野校区総代会長を会長にして、「南陽中学校区青少年健全育成会」が設立された。

平成14年6月に学校評議委員会が開催され、地域の意見を学校運営に生かす道を開いた。

充実する教育活動 「明るく、心温かく、たくましい生徒を育てよう」を目標にした教育活動も年々充実した。昭和61・62年度には、愛知県教育委員会・豊橋市教育委員会より「生徒指導推進事業」の指定を受けた。平成5年11月には、市教育委員会から委嘱を受けた「コンピュータ教育」の研究発表会を行った。平成14年には「福祉教育研究校」表彰を早川勝豊橋市長より受けた。開校以来の「響け 歌声—合唱コンクール」や長距離歩行(南陽ウォーク)は、現在も南陽中学校生徒に受け継がれている。

(5) 磯辺保育園・長栄保育園

磯辺保育園(社会福祉法人豊橋みなみ福祉会)

磯辺保育園は緑豊かで、四季折々の自然に囲まれた環境の中、昭和33年(1958)に磯辺校区の皆さんの熱意と努力により、豊橋市立磯辺保育園として小学校東隣に建設された。園章も「波に千鳥」の磯辺小学校の校章と同じで、中央部に「磯保」とし、地域に密着した保育園として始まった。

昭和46年(1971)には豊橋市立から社会福祉法人へと運営主体が変わり、校区の役員が理事として運営に参加し、さらに地域とのつながりが深くなった。

園の方針は、子どもたちが、健康で安全でそして情緒の安定した生活ができるよう適切な環境を用意し、自己を十分に発揮しながら、健全な心身の発達を図ることとしている。そして一人ひとりを大切にし、感性を育み思いやりのある子どもに育つよう保育に取り組んでいる。

また、保護者の人々と共に子育てについて考え、共育ちが出来るよう保育士一人ひとりが専門職としての意識を持ち保育に臨んでいる。年間行事の中に七夕まつり、クリスマス会やひなまつりと言った四季を感じる行事を行ったり、夕べのつどいや運動会には地域のお年寄りを招待して世代間の交流を図っている。また、障害児指定園として積極的に統合保育を行い、豊橋聾学校幼児部とも行事を通して交流し、思いやりのある優しい子どもに育つような保育を行っている。

少子高齢化が急速に進む中、平成17年3月「豊橋市次世代育成支援行動計画」いわゆる「子育て応援プラン」が策定され、子どもは「国のたから」、「社会のたから」として社会全体で支えあい、子育てに夢が持て、楽しく子育てが出来ることを目標としている。

長栄保育園 (社会福祉法人)

長栄保育園は長栄寺に隣接し磯辺校区の中でも高台に所在する。

昭和50年(1975)当時草間町付近の住宅化、金指造船(現豊橋造船)社宅造営等により地域の人口が増加し住民からの保育所設置の要望が高まった。豊橋市より長栄寺住職に、保育所設立の要請があり、長栄寺が草間学校として住民に開放されていた経緯に鑑み、住民の福祉に貢献することを考慮したうえで、昭和51年(1976)4月に開園した。

以来、法人役員、職員、保護者一体となって保育所の使命に則り、児童福祉事業の健全なる発展と共に、保育ニーズの多様化に対応しつつ、地域乳幼児保育センターとしての充実を期して今日に至っている。

定員120名という中規模保育園の特徴として家庭的な保育を目指している。

園の周辺は新興住宅地として核家族の割合が非常に高くなって来ており、子どもたちは勿論お母さん同士のコミュニケーションの場になるよう、遊戯室を開放した子育てクラブの開設や、育児講座等を行っており、地域に根ざした育児の場所になるように努めている。

4月の花祭り(お釈迦様に甘茶をかけ誕生を祝う)、7月の夏祭り(園児の祖父母、卒園児や地域の人と盆踊りや和太鼓、野外劇場などで楽しむ)、年長児のお泊り保育(親子離れての1泊は、子どもの自信になるとともに、自分の子を見つめ直す親のきっかけとなる)、10月の運動会(親子競技や父母の迫力ある綱引き、年長児のプリティ鼓隊など)、12月のお遊戯会(乳児から年長児までの成長が判り年長児の舞踊も凛々しい)、2月の保育参観・作品展など、子どもの姿を通して大人自身も成長できるようにと考えて各種行事を行っている。

2 社会教育

(1) 校区市民館・地区市民館活動

戦後、豊橋市は戦禍からの復興に懸命に取り組んだ。中でも社会教育の重要性を自覚し、市民の手になる地域社会を目指し、民主的な地域づくりを社会教育に求めた。

昭和22年（1947）に、市は各校区へ社会教育委員会を自主的につくるように要請し、そのための指導者講習を行い、校区社会教育の中心となるリーダーの育成に力を入れた。

磯辺校区でも昭和23年に「校区社会教育委員会」を設置し、昭和24年に「同連絡協議会」を結成して、さまざまな校区の社会教育活動を推進してきた。半世紀を越えた今、校区社会教育活動の一層の充実が期待されている。

磯辺校区市民館

- ・豊橋市駒形町字丸山60 Tel. 46-9440
- ・開館 昭和55年5月2日

昭和55年には市内10校区にオープンしている。開館当日には来館者が200名、校区民待望の市民館開館であった。

「校区市民館のご利用は、1. 校区皆様の集会 2. 研修、グループ等の自主的な会合 3. 図書利用 つまり、気軽な集会場所としてご利用頂くことです。」（市民館だより）

自治宝くじ校区助成金で、市民館で使うコピー機、印刷機、テレビ、パソコン、机、椅子等の備品を購入しました。（平成18年度



開館式典を祝う磯辺校区市民館 昭和55年

校区コミュニティ運営委員会)

「趣味の作品展」開催

「毎年校区体育祭に併せて町内会の人々、当市民館の趣味の教室のグループの皆さんで作品展示発表しています。作品集めや展示の作業は大変ですが、年々盛大になっていくのが楽しみです。」（校区社会教育委員談）

南陽地区市民館

- ・豊橋市草間町字平東89 Tel. 48-6576
- ・開館 昭和62年4月6日

市内で19番目の南陽地区市民館が開館。地域の皆さんの生きがいがづくり、学習の場所、コミュニティづくりでスタートした。



婦人文化大学 手編み教室 昭和62年

【南陽地区市民館の事業】

- 生涯学習支援事業…文化・教養・趣味・健康
- 市民大学トラム
- 高齢者セミナー
- 家庭教育支援事業
- 親子ふれあい教室
- 幼児ふれあい教室
- 文化支援事業…市民館まつり
- 自主グループの育成支援
- 図書の閲覧・貸出
- 広報…市民館だより、市民館ホームページ、行政広報・行事等のチラシ閲覧

生活スタイルの多様化や余暇の充実などから、利用者が急増してきている。自主グループ活動や自主講座参加、市民大学などへの人気がある当市民館への期待は大きい。

3 社寺と史跡

(1) 神社と寺院

① 神社

ア、塩釜神社

豊橋市大山町字東大山18番地

- ・祭神 くにのこたちのみこと おたけりのみこと さるとひこのみこと
 国常立命 怒猛命 猿田彦命
おおたのみこと おきのみこと おくたまのみこと
 太田命 気命 奥玉命

- ・例祭日 11月3日
 ・由緒 棟札によると明暦2年(1656)に祀る。
 ・大正4年(1915)供進神社に指定される。



境内にある「クロガネモチ」の木
 「とよはしの巨木・名木100選」に選定

イ、本宮神社

豊橋市駒形町字丸山50番地

- ・祭神 ことさかのおのみこと はやたのうのみこと いざなみのみこと
 事解男命 速玉男命 伊佐那美命

- ・例祭日 11月第1日曜日
 ・由緒 棟札によると寛永13丙子年(1636)に初めて祀る。境内中奥に天神石があり、古くは「磯辺天神」現在は「草間天神」とも称している。

ウ、春日神社

豊橋市草間町寺字東22番地

- ・祭神 あまつこやねのみこと おおさぎのみこと
 天津児屋根命 大鷦鷯命

- ・例祭日 10月第4日曜日
 ・由緒 社伝には元禄7年(1694)に祀るとあるが、寛永3年(1626)に造営の棟札がある。
 ・「葺間天神」を祀っている。
 ・明治45年(1912)に現草間町公民館付近にあった若宮八幡社を合祀した。

エ、素盞鳴神社(旧 牛頭天王社)

豊橋市向草間町字向西122番地

- ・祭神 すさのおのみこと うかのみたまのみこと
 素盞鳴命 倉稻魂命

- ・例祭日 10月第4日曜日
 ・由緒 棟札によると寛永6年(1629)祀るとある。祭神倉稻魂命は同村の稲荷社にあったのを大正10年(1921)に合祀した。

オ、八幡社

豊橋市一色町字一色郷30番地

- ・祭神 おおさぎのみこと
 大鷦鷯命

- ・例祭日 10月第4日曜日
 ・由緒 棟札によると明暦2年(1656)に初めて祀る。

カ、神明社

豊橋市松井町字松井129番地

- ・祭神 あまてらすおのみかみ
 天照大神

- ・例祭日 10月16日
 ・由緒 勧請年月不詳。字道目記鎮座社伝には享禄3年(1530)伊勢大神宮の御分霊を当地近くに仮安置したとある。当初は大山町字道目記にあったが明治10年(1877)現在地に移した。

キ、素盞鳴社(旧 牛頭天王社)

豊橋市王ヶ崎町字宮脇3番地

- ・祭神 すさのおのみこと
 素盞鳴命

- ・例祭日 4月14日
 ・由緒 寛永9年(1632)12月に初めて祀るとある。
 明治以前は牛頭天王社といわれていた。

ク、二開神社

豊橋市神野新田町字会所前141番地1

- ・祭神 とよけのおのみかみ
 豊受大神

- ・例祭日 10月第2土曜日
 ・由緒 明治28年(1895)神野新田三郷にお社が建てられたとき、二回町に祠とし祀る。大正12年(1923)に社殿を改築し拜殿を造営。このとき二開神社として祀る。
 (『豊橋市神社誌』)

② 寺院

ア、天猿山 長栄寺 (本尊 釈迦如来)

豊橋市一色町字天猿18番地

臨済宗妙心寺派。創立は天正11年(1583)で、はじめ駒形町本宮神社近くにあつて本宮山長福寺と称した。延宝元年(1673)現在地に移転し享保4年(1719)に長栄寺と改称。寺子屋を開いており、明治6年(1873)には磯辺小学校の前身である「草間学校」が開校された。昭和51年(1976)に長栄保育園を開設、地域の教育に貢献している。

イ、松嶽山 大應寺 (本尊 地藏菩薩)

豊橋市草間町字大應寺前31番地

曹洞宗。もとは大雄院と呼ぶ真言宗寺院であったところ、大永7年(1527)に再興改宗されている。旧幕時代黒印2石を受ける。当時は現在地の北西の昭和池の辺りにあつて、昭和5年に寺域を現在の地に移し、昭和7年(1932)本堂を改築落慶している。

ウ、医王山 東光寺 (本尊 薬師如来)

豊橋市向草間町字向中25番地

曹洞宗。はじめは真言宗。寺子屋を開き村民の教化に当たり、明治時代に草間村会仮議場になる。平成4年本堂を改築落慶した。

当寺に明治12年山本武八氏編の『草間区地誌略』がある。

エ、無量壽山 阿彌陀寺 (本尊 阿彌陀如来)

豊橋市王ヶ崎町字王郷62番地

臨済宗妙心寺派。創建は応徳元年(1083)。隣地にある王塚古墳の供養寺として建立。鎌倉以前は真言宗の寺院であったようだが、臨済宗に改宗。かつて境内のすぐ近くまで潮が満ちていたことから、水難事故者を供養する「河施餓鬼」をした記録がある。本堂には一望十景の詩画額が掲げられ、牟呂望海等の詩篇もあった。昭和20年の空襲で全焼。現在は小浜の万福寺が兼務し、平成15年本堂の再建や境内の整備がなされた。

③ 水神

ア、昭和池の水神 (草間町)

祭神 水速女命

江戸時代から杓子池の守護神で上池の堤にあつた。明治の初め頃は、2月27日の祭礼には磯辺村と牟呂村の村人が大勢集まり、四斗樽のこも被りを抜いてお祝いしたと言われる。明治42年(1909)上池の堤補強工事に際し、中池の堤に移された。昭和4年(1929)杓子池の拡張工事により、現在の公民館西にあつた作業場南に移された。新しい堤の完成により大応寺裏の橋の横に移したが、昭和48年(1973)下水道工事により、耕地整理組合記念碑と共に現在地に移した。現在も毎年2月27日に草間町の人々が水神様の前でお祈りしている。

イ、青尻の水神 (大山町)

明治より以前は、この地方では田や畑の肥料に藻や蛭類を採取して使っていた。

農家にとって海藻や蛭類は大切な肥料であったので、海岸沿いの中洲の現在の位置に水神様を祀り、海藻の豊漁や海の安全を祈願していた。毎年旧暦12月になると、一年間の感謝や来年の豊作と家内安全を祈願して、近くの田畑の持ち主が順番にお参りしていた。今も石造りの祠と鳥居がある。

ウ、欠下の水神 (駒形町)

本宮神社の石段の下にある灯籠が水神様である。もとは南陽中学校の南の欠下にあつた。

新田開発の前にはこの辺りまで海であった。東側の崖には牟呂方面への道が通っていて、西風の吹き付ける大変危ない場所であったと言う。明治になって神野新田工事の時に、灯籠を本宮神社の境内に移した。その後も旧暦の初午の日に、毎年僧侶を呼んで本宮神社氏子総代、大山町と駒形町の総代で大切にお祈りをしている。灯籠に「水神明王」「文化四丁卯九月吉日」とある。

(2) 史跡・石碑・筆子塚

① 史跡

ア、磯辺王塚古墳

所在地 王ヶ崎町王郷14

南陽通り小浜交叉点より南へ約100mの左手付近で、現在では民家の駐車場前に豊橋市教育委員会の看板、その下に発掘された石がある。

この場所は、高師原の北西端が柳生川の左岸の沖積平野にわずかに突き出したところで、砂堤との境界にあたる標高3mの所である。当時は、海岸砂丘のすぐ西側が海であり、関連する集落の位置は明確でないが、食糧生産の場所に隣接しており、水害等の災害に対しても安全な段丘の縁か砂堤の上と推測されている。

江戸時代に始めて発掘されたが、それは、偶然見つけられたもので、弘化3年(1846)近くの秋葉神社の石灯籠が破壊したので、再建しようとして、王塚の石を掘り出したところ石の下からかぶつちのたち頭椎大刀とかんとうのたち環頭大刀の柄頭、柄金具、鏢、鞘金具など17点と須恵器2点が発見された。これらの遺物は吉田藩に提出されたが、ときの吉田藩主まつだいらのぶあき松平信璋の命で埋め戻された(『豊橋市史』)。その後も数度の発掘があり、優れた出土品の存在が知られていたが、平成3年土地所有者の宅地化の要請により、平成9年(1997)に本格的発掘調査を行った結果が、『埋蔵文化財調査報告書43集 磯辺王塚古墳』(豊橋市教育委員会)として報告されている。それによれば、横穴式石室で主体部は長さ約10m、幅約2mに玄室部長6.6mせんどう羨道部長3.6mの規模の古墳である。

既に掘られていたことから当時の代表的な前方後円墳の形を確認できなかったが、6世紀後半の三河湾最奥部に展開していた沿岸部首長系列に属する古墳としている。

出土遺物は人骨を含め全て豊橋市美術博物

館に保管されており、特に貴重な玉類は常設展示されている。

出土品の中に、飾り太刀があり、これを分析した結果、朝鮮半島産の金属のようである。

しかし、その他の装飾品は、国内の他所より発掘されたものと同様に、古墳時代の後半には高い製造技術であることが確認されている。

イ、草間城址

所在地 城山町から向草間町素盞鳴神社付近

室町時代の初めの頃、この地方は高豊を中心にくろだ畔田氏くろだがおり、今もその付近に城下と言う地名がある。

この畔田氏(黒田)の城として畔田屋敷、草間城、まじやま雉子山城、なかせこ中瀬古屋敷の4ヶ所あったと言われている。

草間城は、高師原の端で半島形に突き出した台地にあり、築城の頃は三方海に囲まれた、要害の地であった。

戦国時代の初めの頃、駿府今川氏の家臣芳賀七郎が城主であったが、その後畔田氏に代わった。牛久保の牧野氏が今の豊橋公園の今橋に西暦1505年に今橋城を築城したときに廃城となった。今橋城は後に吉田城となった。今から500年位前のことである(『渥美郡史』)。

現在、向草間町の公民館に、草間城絵図の写真が掲示されている。

草間城址は、昭和5年(1930)ころの不況時に、失業救済事業として梅田川改修工事が行われたとき、改修堤用として城跡から土を取ったので、山は崩され昔の面影はないが、素盞鳴神社裏手の林の中に入ると、昔を思い浮かべることができる雰囲気は残っている。

戦後、農村地域であるこの地方も、宅地化が進む中、昭和37年(1962)に城跡の整地されたところに最初に団地ができ、翌年に向草間町から独立し城山町となった。その後、更なる団地の拡大が進み現在に至っている。

② 石碑（記念碑・歌碑）

ア、磯辺の忠魂碑

駒形町 校区市民館駐車場
陸軍大将 鈴木 莊六 書
日清戦争、日露戦争、満州事変
支那事変、太平洋戦争の戦没者名

イ、磯辺の日清従軍記念碑

駒形町 校区市民館駐車場
陸軍少将 従四位勲二等 原口 兼济 書
明治27年（1894）戦没の従軍者名

ウ、磯辺の日露従軍記念碑

駒形町 校区市民館駐車場
明治37年（1904）戦没の従軍記念
昭和7年（1932）3月建立

磯辺校区市民館駐車場にある墓誌文

平 和 の 礎 <small>いしづえ</small> 墓 誌 忠魂碑 日清、日露戦争、第一次世界大戦並びに 太平洋戦争戦没者百三十六柱の英霊を祭る 建立経過 一、昭和十年三月十日 磯辺小学校 東門北側に建立 一、昭和二十一年 撤去 地下に埋設 一、昭和二十七年 同地に再建 一、昭和三十九年 駒形町丸山六十一の 一番地に移転建立 一、平成四年五月十三日 駒形町字退松 十九番地移転建立（現在地） 日清従軍記念碑（右側） 明治二十七、二十八年 日清戦争従軍記念 明治三十七年 本宮神社前に建立 昭和七年三月十日忠魂碑横に移転建立 日露従軍記念碑（左側） 日露戦争並びに第一次世界大戦従軍記念 昭和七年三月十日 忠魂碑横に建立 平成四年六月吉日 豊橋市磯辺校区総代会
--

エ、名誉市長 おおたけとうち 大竹藤知氏胸像

草間町 昭和池堤防
平成二年十月吉日

オ、磯辺の耕地整理組合記念碑

草間町 昭和池堤防
組合長 大竹 藤知 書
昭和二十七年八月一日
御大禮記念磯辺耕地整理組合

カ、春日神社の歌碑

草間町 春日神社
此の里の名 寛永三年の棟札には
大草間村とあり
すめ神の御恵の露し深ければ
大草間とはなつけたりなむ
昭和九年秋 鈴木松太郎

キ、秋葉山常夜灯

草間町字郷西
（正面）秋葉山 村中安全
（右側面）弘化二年 きのとみ 乙巳三月吉日

ク、秋葉山常夜灯

向草間町字向中 東光寺
（正面）秋葉山
（右側面）弘化三年 午六月吉日
（左側面）大神宮
（裏面）こずてんのう 牛頭天王
毎年12月中旬例祭日、新嘗祭、秋葉祭の
日、午後5時よりお祈りしている。

ケ、庚申塔 こうしんとう

草間町字東郷 草間町公民館
（正面）南無青面金剛童子
延宝八 かのえさる 庚申十一月五日
毎年8月24日に町内会役員、老人会員、
大応寺住職でお祈りしている。なお別の
場所にある六地藏もお祈りしている。

コ、庚申塔

向草間町字向中 東光寺
（正面）庚申 かんえん
寛延二 つちのとみ 己巳十一月二十七日

③ 筆子塚

筆子塚とは、江戸時代末期から明治6年(1873)ごろまであった寺子屋の先生(当時

は師匠と言われていた)の死後、師匠に学んだ恩を忘れないで、お金を出し合って建てたお墓のことで、磯辺校区には次の4基がある。

ア、^{ないとうちゆうえもん}内藤忠右衛門師匠の筆子塚

所在地 高師緑地公園南西角の墓地内



内藤忠右衛門夫妻の筆子塚

明治34年(1901)10月建之
法名 釋善量 釋尼妙祐
台座に筆子の名前があるが判明できない

ウ、^{しらかわげんりゅう}白川玄流師匠の筆子塚

所在地 東光寺墓地内



白川玄流の筆子塚

明治15年(1882)1月17日建之
法名 大焉素童大和尚
台座に筆子中とある

イ、^{なかじまいちごろう}中島市五郎師匠の筆子塚

所在地 長栄寺墓地内



中島市五郎夫妻の筆子塚

明治20年(1887)8月4日筆子中建之
戒名 善光定照居士
普室貞満信女

エ、^{やまもとげんごろう}山本源五郎師匠夫妻の筆子塚

所在地 大山町西大山墓地内



山本源五郎夫妻の筆子塚

明治28年(1895)1月建之 弟子中
戒名 鶴文軒紹等居士
南林庵清岳大姉

(3) いいつたえ・いわれ

天神石とお亀石

駒形町の本宮神社の本殿奥に「天神石」と「お亀石」の大きな石が祀られている。

昔から「磯辺天神」後に「草間天神」の社やしろといわれていたことから、「天神石」と名がついたと伝えられている。

日本武尊が東国を治めに行くとき、この石に腰をおろして、月を眺めて一夜を明かしたという話が残っている。

「お亀石」にもこれに関する民話があり、大きな亀の形をしていることから健康長寿の守り神として「天神石」が祀られているところに置き、同じように手厚く祀ってきた。

鍛冶屋敷

本宮神社の北東500メートル付近を鍛冶屋敷と呼んでいる。

住居を建てるのに使うような石が発見されていて、昔はこの辺りに人が住み着いていただろうといわれている。

日雇取坂

向草間町の台地から内張川に向かって下り坂のところに、「日雇取」という地名がある。

昔、梅田川の河口から舟で着いた荷物を日雇いした人夫たちがこの坂を運んだことから名付けられたといわれている。

塩浜

大山町に塩浜という字名があり、昔ここで塩を作っていた。

梅田川の河口は2ページの地図のように幅広く遠浅の地形から、この付近でも塩を作っていたようで、塩釜神社もそれに関連して勧請したといわれている。

草間村の七度火災と除災奇談

『三河国奇談聞見集』に記載の奇談

寛政5年(1793)9月19日草間村一色の久右衛門の小部屋から出火すぐに消火したが、不思議なことに、これから一ヶ月の間に丸焼

け4度、小火災3度都合7度の災難、誠に前代未聞と記している。

4度の火災の後に、お寺での御祈禱や焼け跡での施餓鬼をつとめたが、その後も火災が発生したので、さらに秋葉山と伊勢参りの3年の間、年参りの願を立てた後に安穩になったという。この話は、植田義方うゑた よしえが長栄寺11代貫道禅師から聞いた話を記録していたものをさらに羽田野敬雄はだ の たかおが『三河國奇談聞見集』に採りあげたものである。

長栄寺11代貫道禅師かん どう ぜん じは、宝暦10年(1760)に入山、寛政11年(1799)隠居するまで40年近く在住した。その間、観音堂の建設など設備を整え、田畑も増して充実に努めている。蔵書目録には禅宗の本を中心に多方面の書籍百部が挙げてある。

磯辺王塚古墳に関連する2話

ア 古墳を発掘した「弥助」が病に臥す

『栄樹園聞見類集』に記載の話

草間村の秋葉山常夜石燈籠が大風津波で破壊したので、弘化3年(1846)に王ヶ崎本宮(もとみや天王山王塚ともいう)で大小石を掘り出したところ下より古銅鉄器などが出た。

それらを役所に差し出したところ、掘り出した者の内「弥助」が風邪で臥せり、夢の中に多勢の行列が出てきて胸を突かれて痛みを感じたが、目が覚めても痛みがあることから、小浜の万福寺住職が施餓鬼をしたところ痛みが消えたという。

イ 百済王「愛岑」を埋葬した王塚

『草間区地誌略』に記載の話

仁明天皇の時代(830~850)に、百済(現在の韓国)の王「愛岑」は、安房の国からこの地、三河に移り住んでいたという。これらの人が亡くなり葬られた塚を王塚という。

4 民俗

(1) 駒形共同浴場

この浴場のはじめは、明治41年（1908）、高師村に第十五師団が設置されたころ、駒形の二人が銭湯として建てたが、入浴利用者が思ったより少なく、大正6年（1917）に町内で買い取って共同浴場にしたという。

入浴するのは駒形の居住者約60軒で順番に風呂たき、風呂番、掃除やいたんだ所の修繕をしながら使った。この頃の浴場のつくりは二階があり将棋などの娯楽や青年団の集会所に使っていたという。

昭和30年（1955）5月に建物を再建した。戦後の最盛時には約70軒で家族入浴者は約400人を越えていた。

しかし、農家がほとんどであった町内も近年は内風呂の家庭が増えたり、家族数の減少から利用者が減った。

そして、大崎街道の交叉点・道路改良により平成15年5月に長年続いた「駒形共同浴場」が幕を閉じた。



駒形交叉点 共同浴場外観



共同浴場 入口とのれん

(2) 善光寺講

「善光寺さま」と呼んで、講員の家で交替で供養している。なお、毎年1月26日に「お勤め」のときに駒形公民館で「鈴木新八先祖代々」の掛け軸に全員でお参りしている。

鈴木新八家は屋敷地を「善光寺講」に寄付した。左に記述の「駒形共同浴場」はその土地に建っていた。

(3) 大峯講

大山、駒形には大峯信仰があり、「大峯講」の家では、息子達が大山参りの修行をしていた。村には先達（案内人）がいて、この修行の旅に出かける若者達を引率した。大峯参りは、大山と駒形では昭和35年が最後であった。戦前のように、20歳前の14人前後で出かけている。出かける者全員で1週間梅田川に入って身を清める。7月10日前後の田植えを無事にすませたころ、牟呂から伊勢船と呼ぶ臨時の船で二見浦へ行き伊勢神宮を参拝した。昭和15年は、すでに戦時色が濃厚だったので当時は国民服を着て旅をした。

近鉄電車（だんざんじんじや）で談山神社、榎原神宮、長谷寺と観て巡り長谷寺近くの旅館に一泊した。

吉野川に入って身を清め、坂を上がって吉野山宿の「喜蔵院」に泊まる。銅の鳥居の発心門から蔵王堂、お亀石、西の覗きなど行場を巡る修行を無事に終えて橋本で泊まる。

ここで若者達は先達と別れて、高野山参りと四国の金毘羅さん参りに向かう。大阪港から夜の船で船内一泊、金毘羅参りの帰途も夜行船便で、奈良見物をして豊橋へ帰った。帰ってから「おやまがえし」で二川の岩屋山に全員で登っている。

こうした大峯山修行をした高齢の方々は、「その当時は大峯山参りをすませると、村のお付き合いの場に出られるし、村の人々から一人前に認めてもらえるようになったことを嬉しく思った。」と懐かしそうに語られた。

5 校区の人物

やまもと ぶ はち
山本武八（大山町『草間区地誌略』著者）

山本武八は、嘉永2年（1849）8月8日誕生、幼名を岳太郎、後に三代目武八を襲名した。

明治11年（1878）草間村、向草間村、牟呂地域などが合併して渥美郡磯辺村になったとき磯辺村村議会の議員33名の中から選ばれて議長になったのは29歳のときであった。

磯辺が村になる前には地域の戸長であった。

明治9年からの地租改正土地調査を踏まえて明治12年に『草間区地誌略』を作成した。当時、現在の磯辺校区の範囲に近い草間村、向草間村、松井新田の三ヶ村を草間区と称していた。

武八は、この草間区について地理、歴史、当時の人口、景況などをまとめた磯辺地区誌を作成した。その内容は、今回の『磯辺校区のおゆみ』を作成する上で大いに参考になり、その記述の一部を原文のまま記載した部分もある。

山本武八は、このほかに磯辺村に多くの面で貢献している。

- ①明治17年（1884）磯辺村の「地籍図」（豊橋市所蔵）制作の中心人物の一人であり、この「地籍図」はその後の耕地整理事業にも参考になったと言われている。
- ②磯辺小学校の幹事試補山本源五郎氏（武八の本家すじにあたる）に協力して小学校の移設に指導的な役割を演じた。今でも校庭にある「ムクロジ」の木はその記念と言われている。
- ③画人としても達人であり、現在も向草間町の東光寺と一色町の長栄寺に「地獄、極楽の彩色掛け軸」が掛っている。
- ④駒形町本宮神社境内の手洗い石の一つに武八書の刻印があるといわれている。

そして明治24年（1891）1月21日、41歳の若さで亡くなった。

なかじますけ しろう
中島助四郎（一色町 自由民権運動に参加）

現在の一色町当時は磯辺村一色で文久2年（1862）誕生した。

明治時代の中頃に起きた天皇制絶対主義の確立をめざす明治政府に対し政府転覆を計画した自由民権運動の中の一つである飯田事件に関わった人で、全国的な運動の関係者が、農村地域である磯辺から出たことは注目できる。助四郎が兵役として名古屋鎮台で一等看護卒のとき、飯田事件の首謀者の一人旧田原藩士八木重治の誘いにより政府転覆の檄文散布計画に参加したが発覚し逮捕され、明治18年（1885）10月23歳の時に、内乱陰謀罪で有罪が確定した。

「飯田事件とは、旧田原藩士村松愛蔵らが政府を改革するために、悪政を訴えた檄文の印刷を飯田で行う計画を立てたが、秩父地方の暴動を知り、武力に切り替えた。しかし密告者が出て未実行段階で、明治17年12月に、首謀者らと共に中島も逮捕された。」

この頃の自由民権運動の代表は、映画やTVのドラマにもなった秩父地方の農家の貧困問題から端を発した秩父事件であったが、秩父の失敗により、名古屋と飯田を中心にした人々も行動に移る前に発覚し総勢27名が逮捕された。

その後有志の力添えにより、花田町に居住し飯田線の船町駅勤務となり、家族と共に写した貴重な写真が残っている。

明治44年（1911）3月2日没、享年49。
長栄寺には中島家代々の墓石がある。



中島助四郎氏の船町駅勤務の頃 左の制服姿

おおたけとうち
大竹藤知（草間町 豊橋市第15代市長）



昭和池堤防の大竹藤知氏胸像

現在の草間町当時は渥美郡高師村大字磯辺字東郷の農家に明治14年（1881）2月13日誕生し、30歳で高師村の村会議員をかわきりに、村の助役から村長になったのは36歳だった。

昭和7年に町村合併で豊橋市に編入されると豊橋市会議員となり、愛知県会議員から議長にまでになった。

昭和22年（1947）4月最初の公選市長選に立候補し、強固な農村地盤の支持により第15代豊橋市長に当選し、同27年6月2期目の途中で病気により退任するまで約5年間務めた。

市長として「市政の民主化が私のモットーである」と宣言し、豊橋市の戦後復興と将来の産業都市を目指して活躍した。

戦争で焼失した小中学校の復旧、豊橋民衆駅の建設、陸上競技場の建設などを行ったほか、日紡誘致による女性の働き場所の確保、東都製鋼誘致による男性の働き場所の確保などの努力の途中で退任であった。

市長になる前には、磯辺耕地整理組合の役員として活躍すると共に、昭和池の工事計画立案から完成まで中心となって活動した。

このころ農村でも弓道が盛んで、日置流へきりゅう雪荷派せつかの師範として教えていたこともある。

没後、これらの功績を記念して平成2年（1990）昭和池南端の堤防に胸像が立てられた。

昭和28年（1953）6月6日没、享年72。

おおす かはつお
大須賀初夫（向草間町 郷土史研究家）



大須賀初夫氏

明治41年（1908）10月15日、大須賀幸一・みすの長男として向草間町に生まれた。磯辺尋常高等小学校から愛知県第一師範学校を昭和2年（1927）卒業して、田原東部尋常高等小学校・田原中部尋常高等小学校・昭和16年から田原中部国民学校訓導として勤務、同18年愛知県教育会へ出向し、昭和22年（1947）から高豊中学校・牟呂小学校・北部中学校の教諭、教頭として勤務し、昭和32年（1957）から津田小学校・北部中学校校長を歴任した。

この間、田原の学校在職中には郷土の偉人渡辺崋山の研究に没頭、地元に残っていた崋山関係史料の解読をした。このことが原点となって郷土史の研究に邁進した。

著作、執筆物として、「崋山先生の生涯」（昭16）「三河国宝飯地方出入諍論」（昭33）「三河国村々高附・額田県布告集」（昭61）「伊能忠敬 尾三測量日記」（昭56）「宝飯地方年貢免状集成」「三河国宝飯地方検地集成」（昭33～36 宝飯地方史編纂委）「古文書入門」（昭37 河出書房）「神野三郎伝」（昭40 同伝記編纂委）「磯辺教育百年史」（昭50 磯辺教育百年編集部）「愛知県の地名」（昭56 平凡社）「豊橋市史」（昭48豊橋市）などがある。

この間、豊橋市史編纂委員、愛知大学総合郷土研究所研究員、豊橋市医師会史執筆委員等を歴任した。また、古文書「史の会」をつくり郷土史研究家の育成に努めた。

昭和56年（1981）8月13日没、享年72。

第4章 新しい時代へ

人と人のつながり＝三世代交流に向けて

磯辺校区の歴史を見るに、前章までの記述のように明治時代までは農業が中心であった。

江戸時代末期から明治時代のはじめのころ地域の人々は、8か所の寺子屋を開設して子ども達の教育に熱心であった。

明治時代に入って、豊橋に軍隊が駐屯するようになり、これに関連する施設がこの地域にも建設され、農業以外の人々もこの地域の生活に関わってくるようになった。

その後、太平洋戦争後の昭和の時代まで農業が中心であることに変わりはなかった。

昭和30年頃、戦後の時代は終わったと言われたころから、城山町に市営住宅が建設されるなど、徐々に住宅が増え始めた。

急激に宅地化が進んだのは、平成の時代になって、農業の後継者問題から農地の宅地転用が盛んになったことによる。

そして現在、約4000世帯人口11000人規模になった。

市の南部方面の宅地化にともない、郵便局、ショッピングセンターが進出、旧国立豊橋病院跡地も市の医療機関の建設が予定されているなど住環境地域が形成されつつある。

このことから三河港や明海地区の工場関係者のベッドタウンになることが予想される。しかし、日本の人口は予想より早く平成17年(2005)から減少傾向に入り、今後はますます少子高齢化が進むと見られている。

磯辺地域においても、この傾向に変わりないと思われることから、世帯数や人口の増加はあるものの大きな変化にはならないと見られる。したがって、新しい時代の課題は現在

と変わらず、「校区内の人と人のつながり」といえる。

この人と人のつながりをより一層強くすること、即ち、老人会連合会が提唱している「三世代交流」のシステム確立がこれからの磯辺校区の活性化に繋がる。

「三世代交流」とは、子ども達、親の世代、高齢者の世代が同一場で交流することである。校区全体のイベントとしての「磯辺校区体育祭」、「磯辺フェスタ」など「三世代交流」の場としてのあり方の検討が期待される。

また、各町内会で実施する「神社のお祭り」をはじめ、いろいろなイベントの中での交流のあり方も検討が必要となる。

それにはまず各町内会において、その中心となる老人会の再組織化が必要となる。その時が、団塊の世代の人々を取り込むチャンスと言える。

少子高齢化の中でなくとも、子どもは宝であり、これを地域で見守ることは、磯辺地域では寺子屋時代の昔からその考えが定着している。寺子屋のころは、読み、書き、算であったが、現在では、スポーツ、経験から得られたワザや知識が考えられるが最も重要なことは、「人」として必要なことを伝えることにある。

このたびの磯辺校区史『磯辺のあゆみ』を基に磯辺のことを「三世代」が知る機会に活用することもその一つと言える。

磯辺が、単に住みやすい地域というだけでなく、「人」としてより住みやすい地区となるために全ての世代が協力し合う、そのような時代が遠くないことを期待する。

磯辺校区に関する年表

西 暦	元 号	磯辺校区関係の事項
	古墳時代	磯辺王塚古墳（王ヶ崎）
1083	応徳元年	阿弥陀寺創建（王ヶ崎）
1505	永正年代	この頃草間城廃城となる（向草間）
1527	大永7年	大応寺再興改宗という（草間）
1583	天正11年	長福寺開山（後の長栄寺）（駒形）
*1603	慶長8年	家康江戸幕府開く
1626	寛永3年	春日神社造営（草間）
1629	6年	素盞鳴神社造営（向草間）
1632	9年	素盞鳴神社造営（王ヶ崎）
1636	13年	本宮神社造営（駒形）
1656	明暦2年	塩釜神社造営（大山）
〃	〃	八幡社造営（一色）
1662	寛文2年	松井新田開拓
1667	7年	長福寺一色天猿へ移る
1684	貞享元年	上原新田の開拓
*1707	宝永4年	宝永地震
1719	享保4年	長福寺を長栄寺に改称
1729	14年	塩田を始める
*1854	安政元年	安政の大地震
*1867	慶応3年	大政奉還
		ええじゃないか騒動勃発 草間村にもお札降る
*1868	明治元年	明治維新、王政復古
*1869	明治2年	東京へ遷都
1873	6年	寺子屋から草間学校創立へ（長栄寺）
1878	11年	渥美郡磯辺村となる
1879	12年	草間学校から磯辺学校に、現在地へ
〃	〃	「むくろじ」の木を植樹
〃	〃	山本武八「草間区地誌略」著す
1880	13年	植田橋架橋
1884	17年	磯辺村から牟呂区が分かれた
〃	〃	飯田事件発覚
1885	18年	陸軍歩兵十八聯隊設置
1896	29年	神野新田開拓完成
1902	35年	二回地区磯辺小学校へ通学
1906	39年	豊橋市制施行
〃	〃	高師村大字磯辺となる
1907	40年	小学校校章（波に千鳥）ができる
1908	41年	十五師団豊橋へ移駐、衛戍病院設置
1915	大正4年	大崎橋完成
*1923	12年	関東大震災
〃	〃	二開神社改築（二回地区）
1924	13年	渥美電鉄（豊橋鉄道渥美線）開通
1925	14年	十五師団廃止
1929	昭和4年	御大禮記念磯辺耕地整理組合設立
1931	6年	大崎へのバス開通
1932	7年	豊橋市に合併現在の各町名となる
〃	〃	昭和池が完成（草間）
1935	10年	磯辺青年学校開校（小学校併設）
*1941	16年	太平洋戦争おこる
1943	18年	豊橋海軍航空隊開隊（大崎）
1944	19年	東南海地震

西 暦	元 号	磯辺校区関係の事項
1945	昭和20年	三河地震
〃	〃	豊橋空襲、磯辺地区へも焼夷弾落下
〃	〃	太平洋戦争終戦
〃	〃	陸軍病院が国立豊橋病院となる
1947	22年	大竹藤知氏豊橋市長となる
〃	〃	南部第一中学校開校、磯辺教場設置
〃	〃	市立磯辺小学校となる
1948	23年	磯辺農業協同組合設立（中野）
1949	24年	子ども会ができる
1951	26年	小学校完全給食はじまる
1952	27年	小学校運動場拡張される
〃	〃	磯辺耕地整理組合解散
1953	28年	総代会と町総代組織となる
〃	〃	磯辺土地改良区認可
〃	〃	校区慰霊祭はじまる
〃	〃	13号台風襲来
1957	32年	磯辺小学校新校舎竣工
1958	33年	磯辺小学校校歌できる
〃	〃	磯辺保育園開設（駒形）
1959	34年	伊勢湾台風襲来
1963	38年	城山町誕生
1965	40年	城山団地できる
1967	42年	南部農協設立（磯辺支所）
1968	43年	豊川用水導水開始
1971	46年	小学校のプール竣工
1973	48年	小学校体育館新築
1974	49年	昭和池2/3埋め立て開始
1975	50年	磯辺教育百年史発刊
〃	〃	長栄保育園開設（一色）
1976	51年	愛知県豊橋勤労福祉会館開館
〃	〃	市営草間住宅できる
〃	〃	第1回校区体育祭開催
1977	52年	一色団地できる
1978	53年	学童保育磯辺コスモスクラブ開設（一色）
1980	55年	校区市民館開設（駒形）
1981	56年	松井町新設芦原校区へ
1985	60年	南陽中学校開校（駒形）
〃	〃	中野小学校開校
〃	〃	中野町一部・草間町の一部中野校区へ
〃	〃	一色団地校区総代会に加入
1987	62年	南陽地区市民館開設
*1989	平成元年	1月8日改元
1993	5年	23号線バイパス大山地区完成
1998	10年	磯辺小学校ひまわり学級開設
2003	15年	駒形共同浴場終り取り壊す
〃	〃	消防器具庫移転新設（駒形）
2004	16年	集中豪雨内張川堤防崩れTV全国放映
〃	〃	国立豊橋病院統合 飯村町へ
2006	18年	市制100周年記念行事開催
〃	〃	大崎街道駒形地区拡幅工事完成

*印は日本に関する事項

校区に関する参考文献

草間区地誌略(明12・山本武八)・渥美郡磯辺村々誌(明15・磯辺村役場)・渥美郡史(大12・愛知県渥美郡役所)・春日神社御由緒考(大15・鈴木松太郎)・松井町史(昭10・兵藤吉十)・豊橋寺院誌(昭34・豊橋仏教会)・豊橋整地事業誌(昭34・豊橋整地協会)・豊橋市神社誌(昭44・愛知県神社庁、豊橋支部)・豊橋市史 一卷・二巻(昭和48・昭和50・豊橋市)・磯辺教育百年史(昭50・磯辺教育百年史編集部)・豊橋の地名の変遷(昭51・吉川利明)角川日本地名大辞典23愛知県(昭53・角川書店)・ふるさと豊橋(昭54・豊橋市校区社会教育連絡協)・ふるさといそべ(昭54・磯辺校区社会教育委員会)・愛知県の地名(昭56・平凡社)・飯田事件裁判記事(昭51・信濃毎日新聞所載田崎哲郎)・創立30周年記念誌―足跡―(昭58・豊橋市総代会)・校区社教のあゆみ(昭59・豊橋市校区社会教育連絡協)・郷土豊橋を築いた先覚者たち(昭61・豊橋市教育委員会)・豊橋市南部農協20年史(昭61)・神野新田開拓百年記念誌(平5・神野新田土地改良区)・国立豊橋病院50年記念誌(平7国立豊橋病院)・元御大禮記念磯辺耕地整理組合誌(平8・伊藤忠)・牟呂史(平8・牟呂史編纂委員会)・とよはしの歴史(平8・豊橋市)・埋蔵文化財報告書43集「磯辺王塚古墳」(平10・豊橋市教育委員会)

編集委員

- 委員長 原田 守尉(草間町)
委員 大須賀哲夫(向草間町)
委員 兵藤 寛司(駒形町)
委員 有泉平八郎(城山町)
委員 中島 康夫(中野町)
委員 加藤 数好(向草間町)
委員 内藤 公夫(草間町)

アドバイザー 田崎 哲郎(一色団地)

サポーター 河合 亮二(市役所)

編集後記

平成16年10月、市総代会が市制100周年記念事業の一つとして各校区ごとに校区史を編纂することを決定し、当校区についても校区総代会長が中心となって、別項に示す編集委員会を立ち上げました。同年11月18日に第1回の委員会を開催致しました。それから毎月1回編集委員会を行い、平成18年8月には30回目の開催となりました。

この間に、神社の棟札、地籍図の調査などを行う一方、7名の各委員には約7頁分の項目の担当を割り当て、各自が個々に調査を行いました。その折には多くの人々にお話を聞かせて頂きました。皆様のお名前を列記するべきところではありますが、全体の頁数が限られていますことから割愛させていただきます。

また、南陽中学校、磯辺小学校、磯辺保育園、長栄保育園の方々には、それぞれの関係項目について執筆いただきました。お世話になりました皆様に厚くお礼申し上げます。

この度の校区史作成を担当して、当校区が生活し易い地域であることを改めて確認するとともに、寺子屋開設が代表しているように昔から「人を大切に」していた地域であることを知りました。これからも皆様とともに、この郷土を大切にしつづけたいものと考えております。

最後に、ご協力いただきました多くの皆様に心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年12月

磯辺校区史編集委員一同

校区のあゆみ 磯辺

平成18年12月25日発行

編集 磯辺校区総代会
磯辺校区史編集委員会
発行 豊橋市総代会
印刷 共和印刷株式会社



